

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU NA HIRA

榛名平遺跡

第Ⅰ分冊

旧石器・縄文編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU NA HIRA

榛名平遺跡

第I分冊

旧石器・縄文編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001.3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会



榛名平遺跡調査区全景



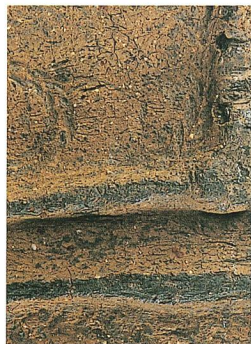
榛名平遺跡調査区近景 遺跡奥が杳沢集落で、集落内より流れ出ているのが宮川。山裾には桜が咲く。



榛名平遺跡調査区遠景 右上より左に流れるのが千曲川、左端で湯川が合流する。遺跡は手前中央部。



榛名平遺跡出土旧石器



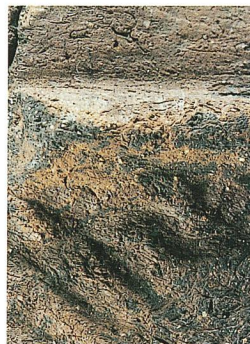
62-1 撚糸の側面圧痕



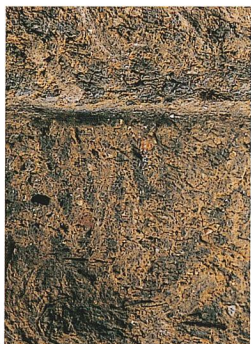
62-2 渦巻状の微隆帯内に撚糸の側面圧痕



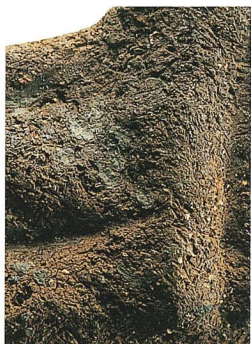
62-3 羽状縄文



63-14 口縁部下に隆帯



63-18 口縁部と隆帯間に撚糸?



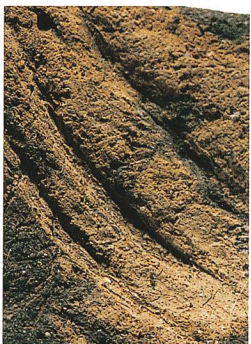
63-28 施文具による押引き状の隆帯



63-33 口縁部に連続した「ハ」の字状の沈線



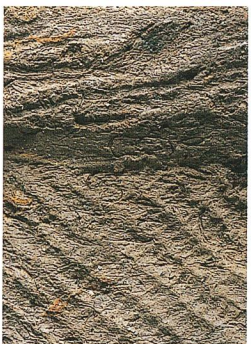
63-34 「X」字状の隆帯を貼付



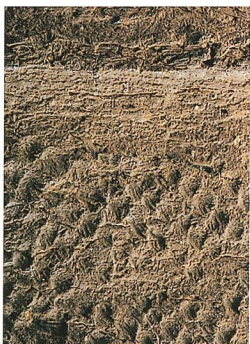
64-39 刻み状の施文は撚糸の圧痕?



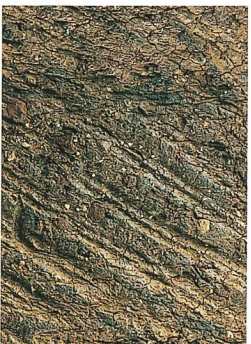
64-41 「ハ」の字状の低隆帯



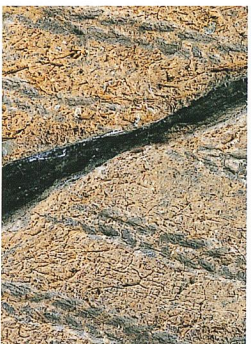
64-64 口縁部に撚糸文、胴部に縄文



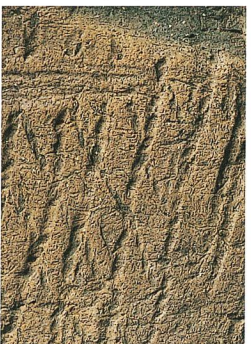
64-65 ナデのような低隆帯



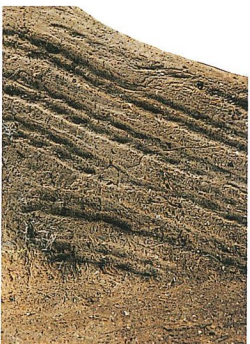
65-69 2本揃えの撚糸文



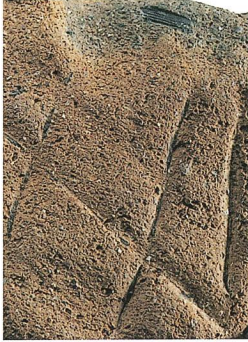
65-79 RとLの2本揃えの撚糸文



65-80 網目状に交互する撚糸文



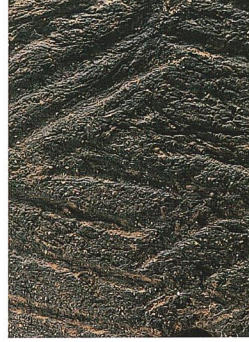
65-81 Rの2本揃えの撚糸文



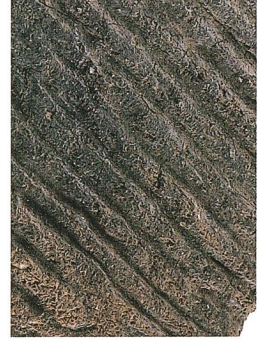
65-91 網目状の沈線



66-112 撚糸文による羽状構成



67-130 撚糸文による菱形構成



67-138 無節?の撚糸文



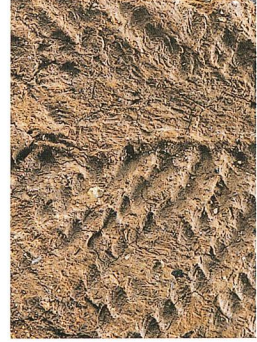
68-147 Lの2本揃えの撚糸文



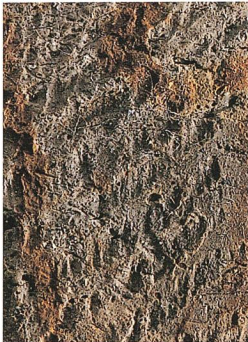
68-148 撚糸文による縦位の羽状構成?



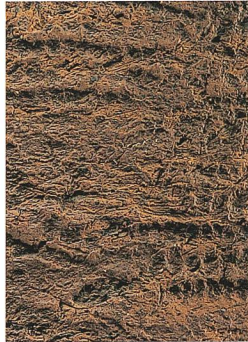
69-3 縄文 RL



69-8 LRとRLの羽状構成



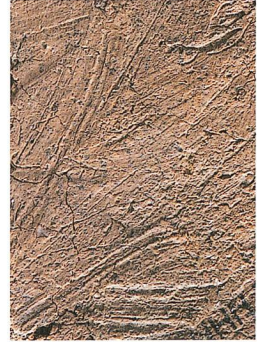
70-27 無節縄文 L



70-32 縄文 RL



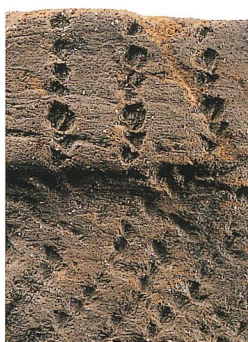
70-36 縄文 RL



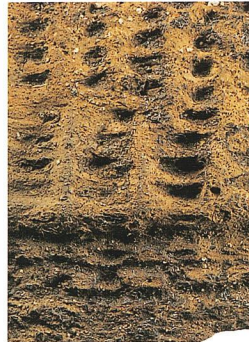
70-36 内面



71-1 櫛歯状工具による縦位の連続刺突文



71-3 縄文の側面圧痕?



71-4 縦位2段の連続刺突文



71-10 縦位2段の連続刺突文



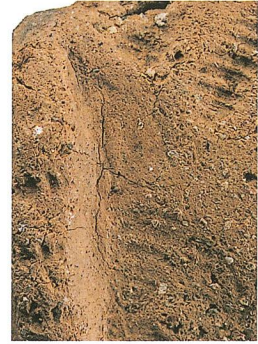
71-14 鏡状工具による連続刺突文



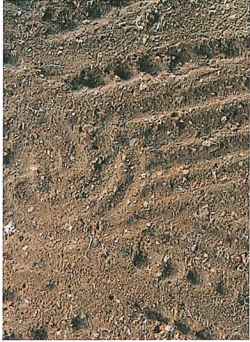
71-18 楕円状工具を斜方向より刺突



71-23 縦位の連続刺突文と条線



71-24 楕円状工具を横方向にひきずる



71-26 楕円状工具による条線と渦巻き



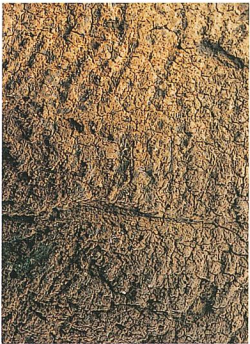
71-27 楕円状工具による横位の連続刺突文



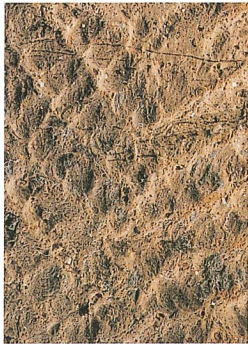
71-34 楕円状工具を横方向にひきずる



72-38 縄文 RL



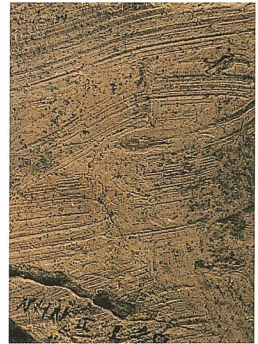
72-39 束の縄文



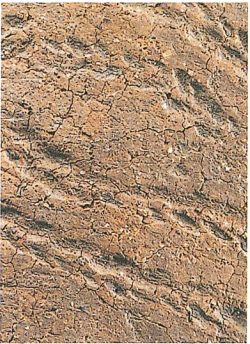
72-46 縦位の羽状構成?



72-53 無節縄文による羽状構成



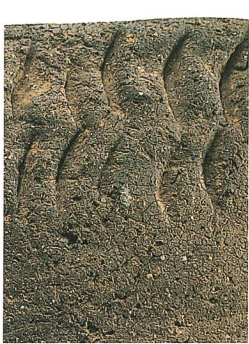
72-53(内面) 擦痕状のナデ



72-59 縄文LとRの擦糸文



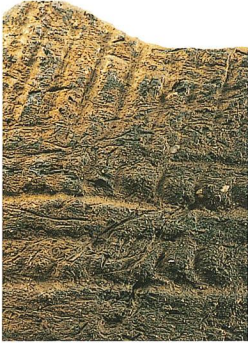
72-64 鏡状工具による刺突



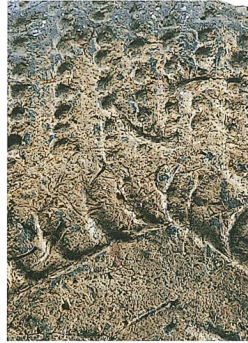
72-65 鏡状工具による2段の刺突



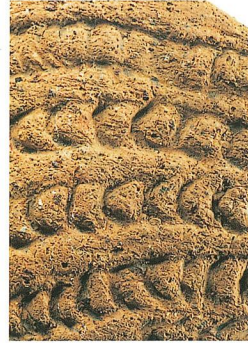
73-68 撚り戻しの縄?



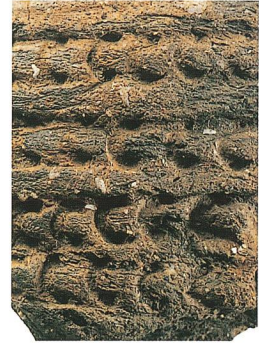
74-1 縦位の列点状刺突文



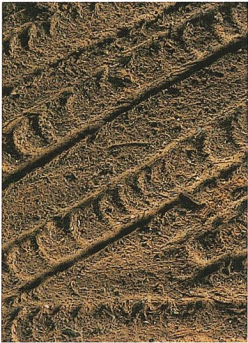
74-2 橢圓状工具による縦位の列点状刺突文



74-4 半截竹管を横方向にずらしながらの爪形文



74-5 半截竹管を横方向にずらしながらの爪形文



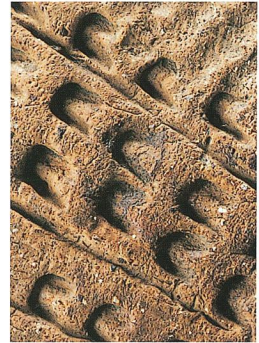
74-20 半截竹管による平行沈線と爪形文



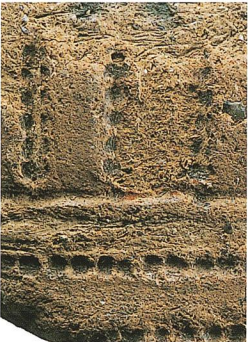
74-24 半截竹管による平行沈線と爪形文



74-25 半截竹管による爪形文



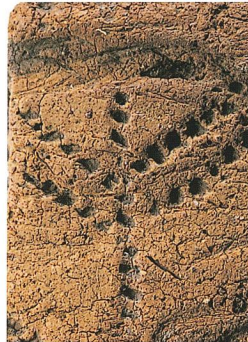
74-34 細い半截竹管を斜め方向に刺突する爪形文



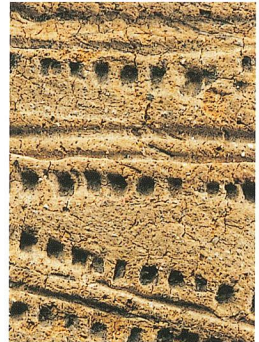
75-38 二重の縦位列点状刺突と横位の刺突



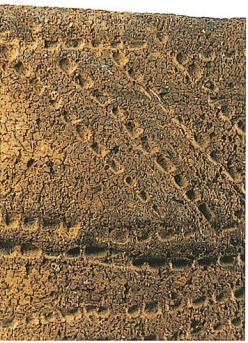
75-39 幅広の列点状刺突文



75-48 列点状刺突により文様を表出



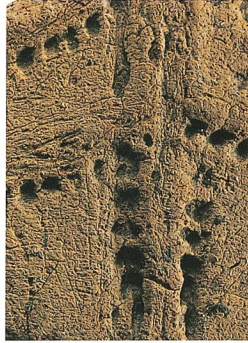
75-49 半截竹管による平行沈線と列点状刺突



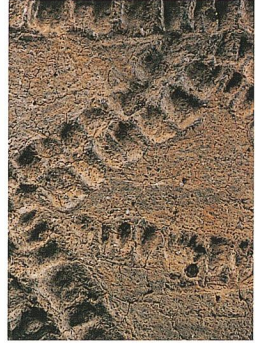
75-51 列点状刺突により文様を表出



75-52 条線と刺突文で菱形構成



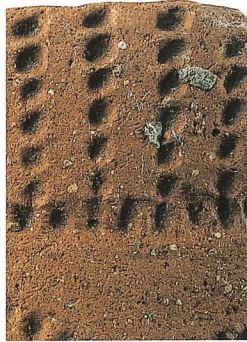
75-61 列点状刺突文



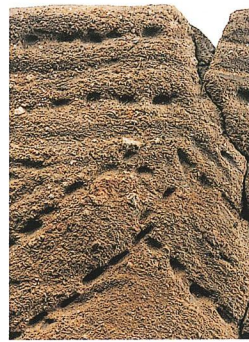
75-62 幅広の列点状刺突文



75-66 絡条体圧痕?による連続刺突文



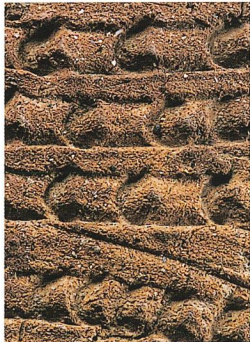
76-71 縦位と横位の列点状刺突文



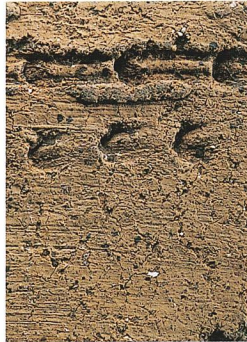
76-75 平行沈線と列点状刺突文



76-81 橢圓状工具を刺突し、引きずり条線



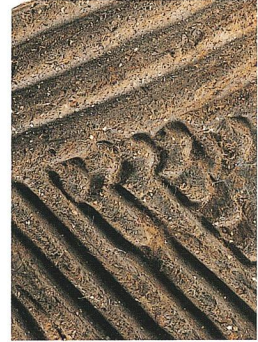
76-89 半截竹管による平行沈線と爪形文



76-90 横方向にずらしながらの爪形文



76-93 半截竹管による平行沈線



76-94 半截竹管による隆帯状の押し引き



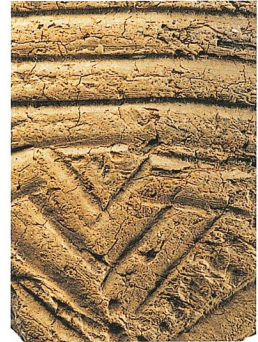
77-1 瘤状貼付文



77-2 梯子状の沈線と円形刺突文



77-6 半截竹管による円形刺突文と爪形文



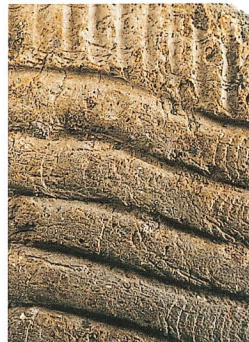
77-12 半截竹管による隆帯状の押し引き



77-16 半截竹管による隆帯状の押し引き



77-22 半截竹管による隆帯状の押し引き



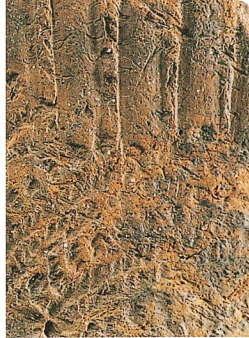
77-33 半截竹管による隆帯状の押し引き



77-34 半截竹管による平行沈線



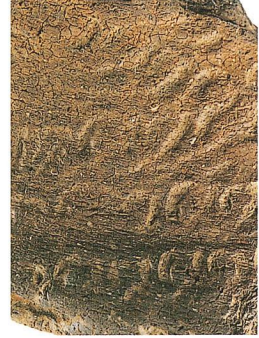
78-36 地文はループ文、半截竹管による爪形文



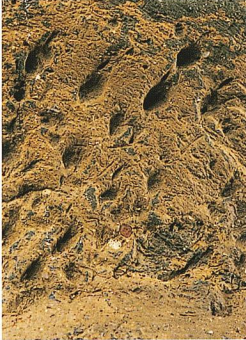
78-40 竹管による縦位の沈線



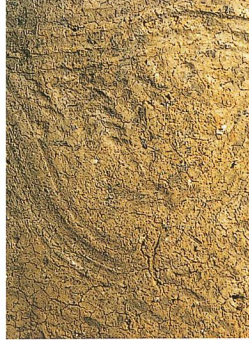
78-45 縦長のコンパス文



78-50 多段ループ文



78-54 合撚り?



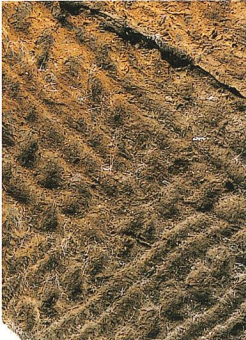
78-55 束の縄文と楕円状工具による条線



78-62 単節縄文?



79-66 正反の合



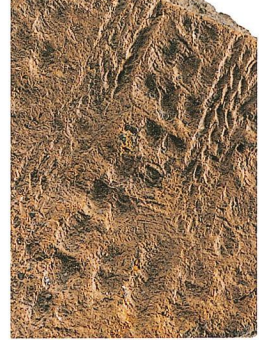
79-73 正反の合



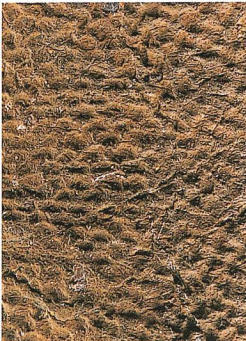
79-74 正反の合



79-86 正反の合



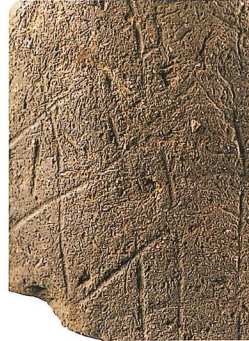
79-87 付加条



79-89 組紐



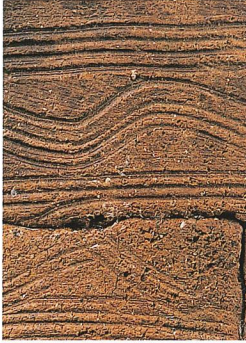
79-90 組紐



80-98 格子目状の沈線



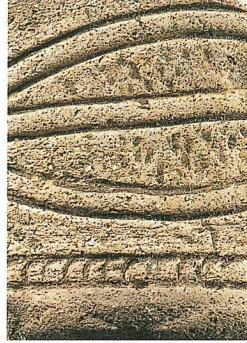
80-99 半截竹管による平行沈線



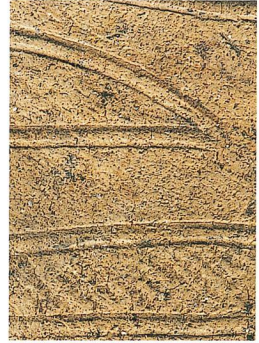
81-5 半截竹管?による平行沈線



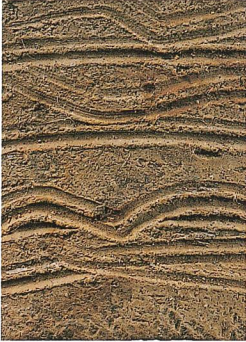
81-7 幅広の半截竹管



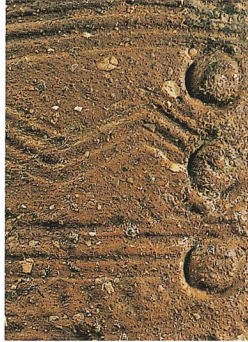
81-18 同群の他にくらべ胎土が白い



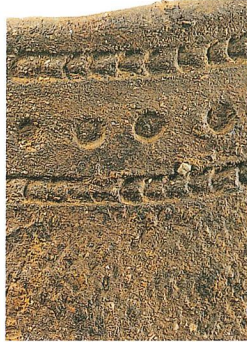
81-19 入組木葉文



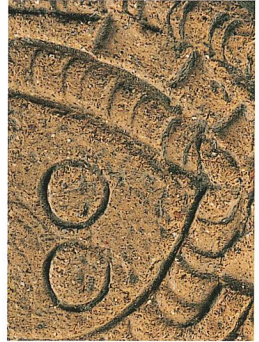
81-24 平行沈線と波状文



82-28 円形刺突文と平行・波状文



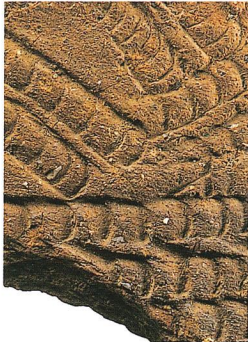
82-47 爪形文と円形刺突文



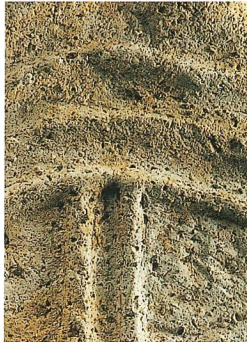
82-54 爪形文、刺突文
円形刺突文



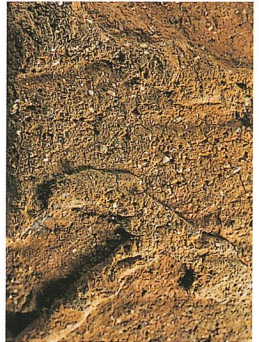
83-58 刻みのある隆帯と爪形文



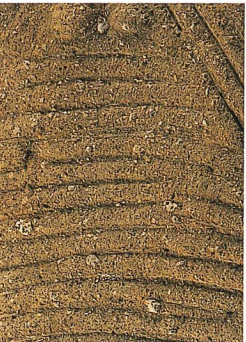
83-60 木葉文的構成



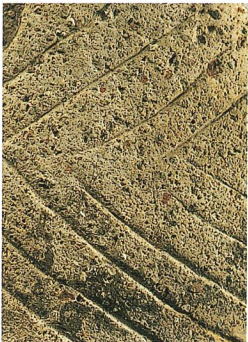
83-66 浮線文



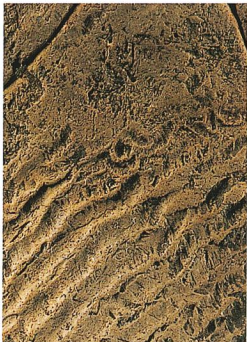
83-68 刻みをもつ浮線文



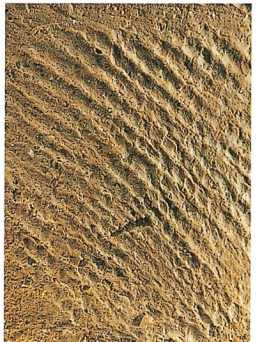
83-81 集合沈線文



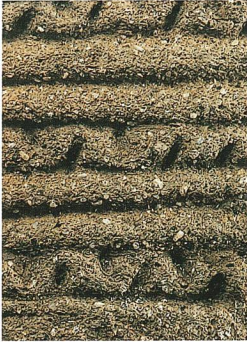
83-83 沈線による羽状構成



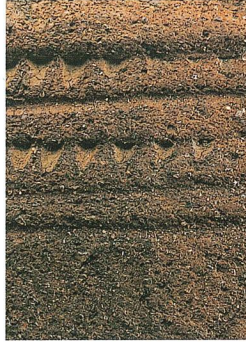
84-1 無節縄文L



84-2 縄文RL



86-1 平行沈線と鋸歯状文



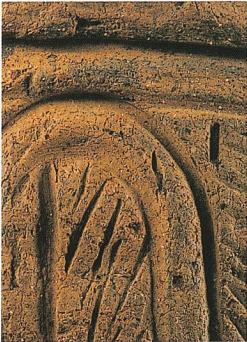
86-4 平行沈線と連続刺突文



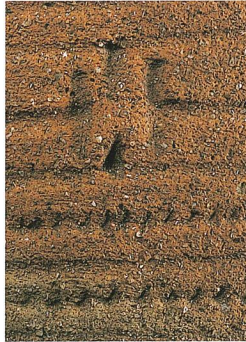
86-13 角押文的な刺突



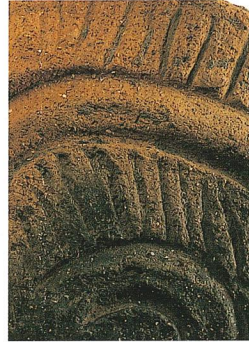
86-14 集合沈線



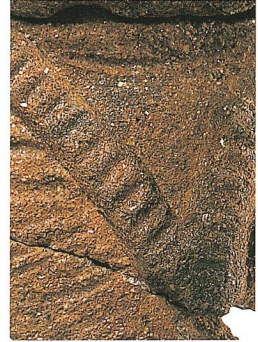
86-17 半隆帯文状の押し引き



86-20 連続刺突文と横位のT字状文



86-21 半截竹管による集合沈線状の施文



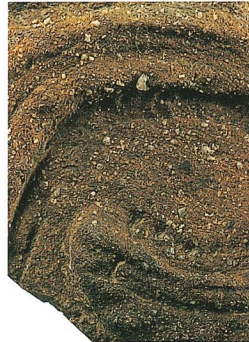
86-25 刻みのあるY字状隆帯



86-26 刺突と平行沈線



87-30 半截竹管による平行・斜行沈線



87-33 渦巻状の隆帯と角押文



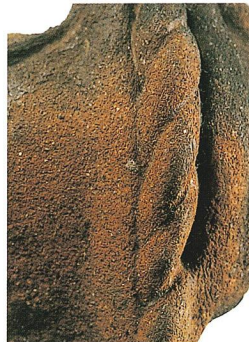
87-42 三角印刻文



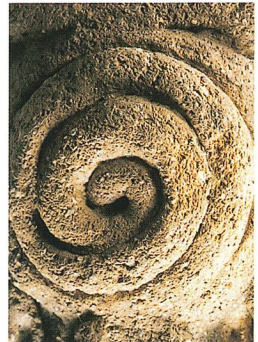
87-44 縦位の垂下隆帯



87-48 渦巻状の角押文



88-51 ねじりを加えた隆帯



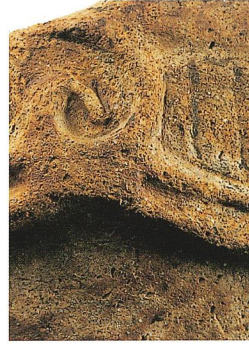
88-55 渦巻状の隆帯



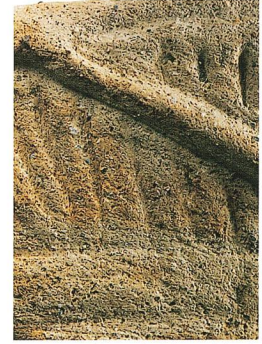
88-58 左右逆方向の爪形文



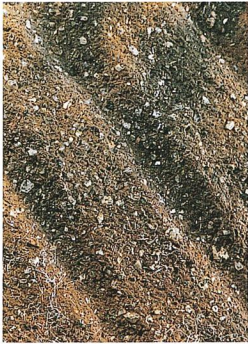
88-59 渦巻状の隆帯



88-61 渦巻状の隆帯をつなぐ区画



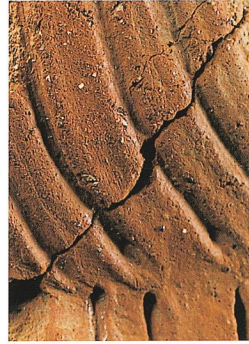
88-63 楕円区画内に平行沈線と粘土紐



89-64 平行沈線



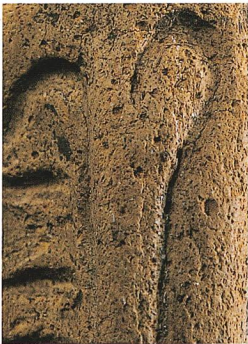
89-72 隆帯による蛇行懸垂文



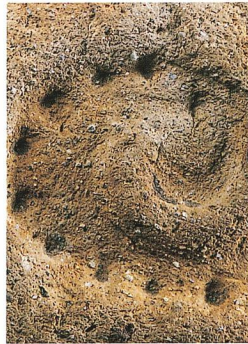
89-75 弧を描く平行沈線?



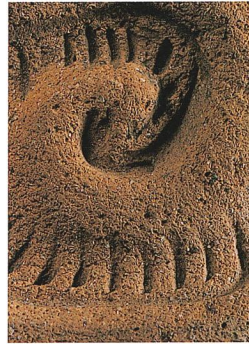
89-79 沈線による渦巻文



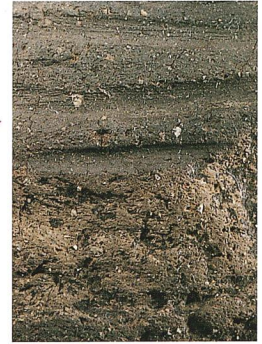
90-86 隆帯上に「J」字状の沈線



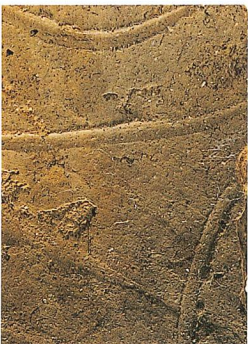
90-89 渦巻状の隆帯内に刺突文



90-91 渦巻状の隆帯内に篋状工具による刺突



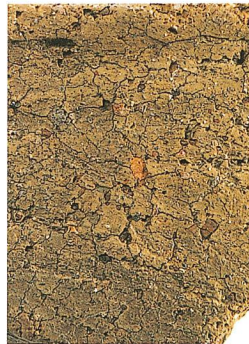
91-1 沈線



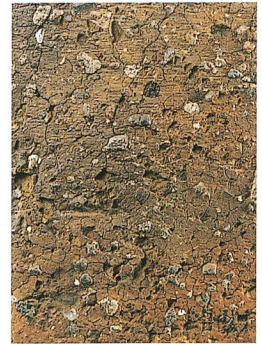
91-2 沈線



91-3 沈線区画内に縄文



91-6 無文



91-12 無文

例 言

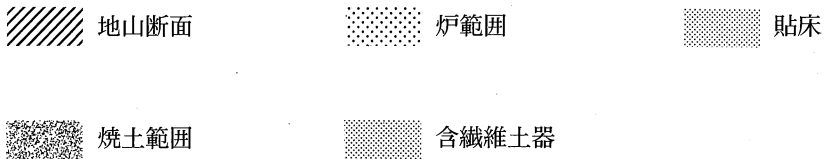
1. 本書は、長野県土地開発公社が行う厚生年金福祉施設建設に伴う用地造成に伴い平成5・6年度に行った榛名平・坪の内遺跡群 榛名平遺跡と坪の内古墳の発掘調査報告書である。整理作業は平成6年度より平成12年度まで断続的に行った。
2. 調査委託者 長野県土地開発公社
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び所在地
榛名平・坪の内遺跡群 榛名平遺跡(NHN) 佐久市大字根岸字榛名平・坪の内3400-1.
3399.3398.3395.3393-2他72筆
坪の内古墳(TTU) 佐久市大字根岸字坪の内 3230
5. 調査期間及び面積
発掘調査 平成5年4月19日～平成6年7月15日
整理作業 平成6年12月6日～平成13年3月31日
調査面積 52,104㎡
6. 本遺跡の航空測量・出土遺物の鑑定・保存処理・実測等の委託は以下の通りであり、玉稿を賜っている。
航空測量 朝日航洋株式会社
人骨鑑定 聖マリアンナ医科大学 平田和明氏・奥千奈美氏
獣骨鑑定 日本ほ乳類学会 宮崎重雄氏
木製品保存処理 株式会社 東都文化財研究所
樹種・種子鑑定 株式会社 古環境研究所
石器実側 株式会社 アルカ
遺構図トレース 株式会社 こうそく
7. 本遺跡の調査は地形に沿って簡易的にⅠ～Ⅳ区までの区割りを行い調査区を設定し、各担当によって発掘調査が行われた。調査区と担当者は以下の通りである。
Ⅰ区平安集落・F区埋没谷 高村文博・林 幸彦
Ⅰ区古墳集落・J区埋没谷・坪の内古墳 三石宗一・小林真寿
Ⅱ区中世遺構群 羽毛田卓也
Ⅲ区平安集落・中世墳墓群 須藤隆司・上原 学
Ⅰ区縄文集落・Ⅱ区平安集落・Ⅲ・Ⅳ区 佐々木宗昭・富沢一明
8. 本遺跡の整理作業を行うにあたり、遺物について旧石器は須藤、縄文は小林、平安は森泉、臼・播鉢は佐々木がそれぞれ基本的分類を行い、古墳時代以降の石材鑑定は羽毛田が行った。原稿は文頭か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集・執筆を富沢が行った。
なお、陶磁器類は(財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、縄文土器はさらしなの里歴史資料館 翠川泰宏氏に、石器類は株式会社アルカ 角張淳一氏・池谷勝典氏に、灰釉陶器は愛知県陶磁資料館 井上喜久男氏に、木製品は鎌倉考古学研究所 齋木秀雄氏に、炭化米のDNA鑑定は静岡大学 佐藤洋一郎氏にそれぞれご配慮を得て、ご教示頂いた。記して感謝申し上げる。
9. 本報告書は時代ごとに4分冊構成とした。第Ⅰ分冊が旧石器・縄文編、第Ⅱ分冊が弥生・古墳編、第Ⅲ分冊が古代律令編として奈良・平安時代、第Ⅳ分冊が中世・近世編として12世紀以降の遺構・遺物を掲載した。なお、時期不明の遺構に関しては関連の可能性がある分冊にそれぞれ収録した。
10. 本書及び榛名平遺跡・坪の内古墳出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

11. 調査から報告書作成に至る過程で以下の方々並びに各機関のご指導・ご協力を頂いた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。(順不同・敬称略)

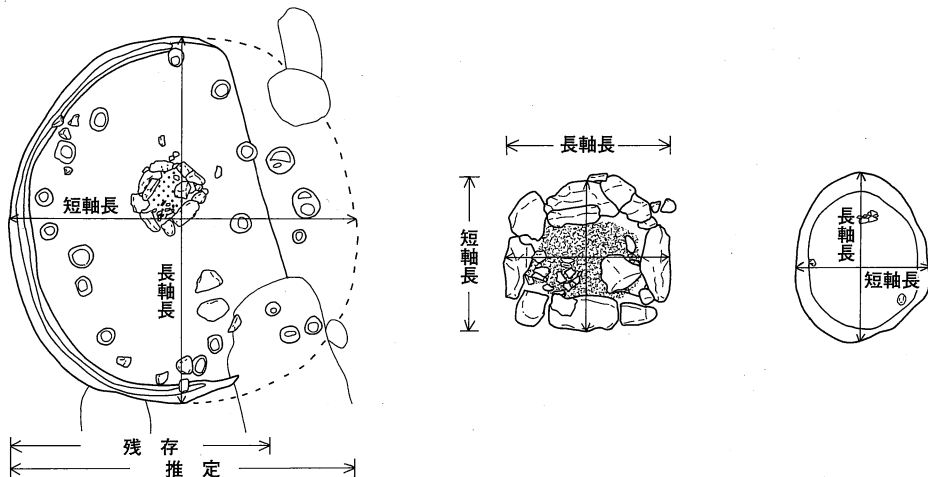
白田武正	水沢教子	相原文哉	堤 隆	小山岳夫	廣田和穂
鳥羽英継	野澤誠一	赤塚次郎	青木一男	森 達也	原 明芳
助川朋広	河西克造	寺内隆夫	宮島義和	福島邦男	田中広明
藤原直人	山下誠二	出縄康行	小池晋禄	鳥羽政之	平田重之
福田健司	服部敬史	花岡 弘	梶原 勝	城ヶ谷和広	傳田伊史
倉澤正幸	上村安生	綿田弘実	(財)長野県埋蔵文化財センター		
佐久考古学会	長野県考古学会	地元沓沢区の皆さん			

凡 例

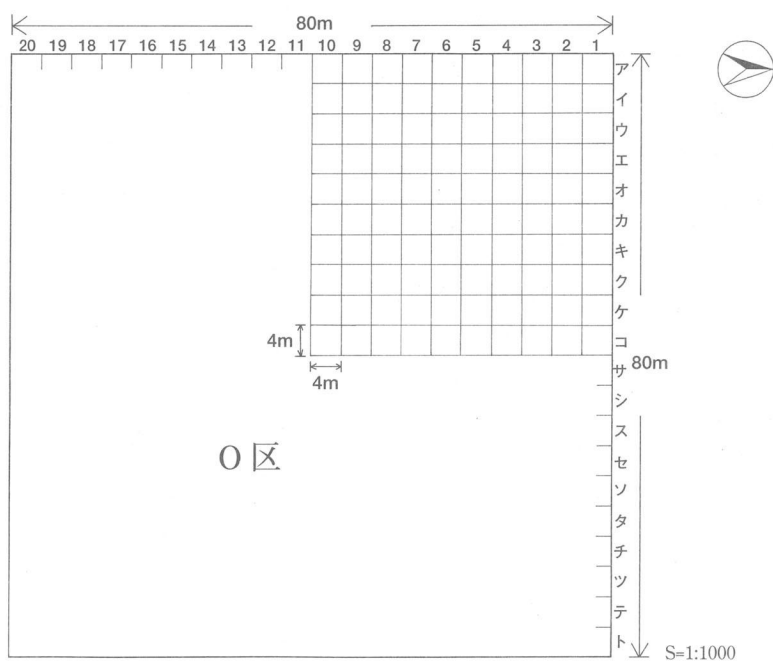
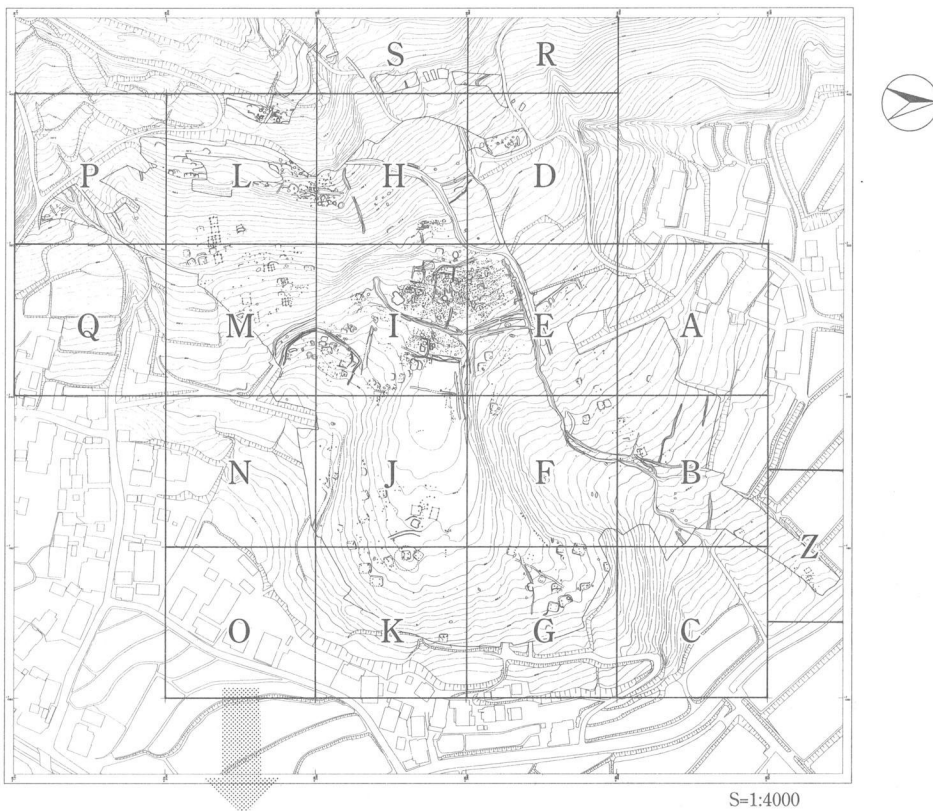
1. 第I分冊は旧石器・縄文時代の遺構・遺物を取り上げた。
2. 遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。
3. 挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。
 竪穴住居址・掘立柱建物址 1/80 炉 1/40 土坑 1/60 土器 1/4
4. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
5. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
6. 遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。スケールは土器 1/4、石器はそれぞれに示した。
7. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、炉部分は測定値より除外してある。
8. 遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
9. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



10. 遺構の計測は下の凡例に従った。



11. 榛名平遺跡の調査グリッドは下図のように設定した。



目次

巻頭カラー図版

例言・凡例

第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	4

第II章 遺跡の環境

第1節 自然的環境	5
第2節 歴史的環境	7

第III章 基本層序と概要

第1節 基本層序	10
第2節 検出遺構・遺物の概要	10

第IV章 旧石器時代の遺物

第1節 遺物	13
--------	----

第V章 榛名平遺跡における縄文時代の概要

第1節 概要	15
--------	----

第VI章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 竪穴住居址	17
第2節 土坑	57
第3節 埋没谷及び遺構外出土遺物	87

付篇	233
----	-----

1. 榛名平遺跡の縄文時代の剥片石器製作技法の研究……………株式会社アルカ 角張淳一
2. 榛名平遺跡出土の打製石斧について……………株式会社アルカ 池谷勝典

写真図版

目 次

第1图	榛名平遺跡位置图	1	第58图	IV D34·36·39·40号土坑实测图	80
第2图	榛名平遺跡周边位置图	6	第59图	土坑出土遺物实测图①	81
第3图	榛名平遺跡周边地形图	9	第60图	土坑出土遺物实测图②	82
第4图	遺跡付近地質断面想像图	10	第61图	土坑出土遺物实测图③	85
第5图	榛名平遺跡調查全体图	11	第62图	第1群土器实测图	88
第6图	旧石器实测图	14	第63图	第2群土器实测图①	89
第7图	I区縄文时代遺構全体图	16	第64图	第2群土器实测图②	90
第8图	I H 1号住居址实测图	17	第65图	第2群土器实测图③	91
第9图	I H 1号住居址出土遺物实测图①	18	第66图	第2群土器实测图④	92
第10图	I H 1号住居址出土遺物实测图②	19	第67图	第2群土器实测图⑤	93
第11图	I H 2号住居址实测图	21	第68图	第2群土器实测图⑥	94
第12图	I H 2号住居址出土遺物实测图	22	第69图	第3群土器实测图①	102
第13图	I H 4号住居址实测图	23	第70图	第3群土器实测图②	103
第14图	I H 4号住居址出土遺物实测图①	24	第71图	第4群土器实测图①	106
第15图	I H 4号住居址出土遺物实测图②	25	第72图	第4群土器实测图②	107
第16图	I H 6号住居址实测图	27	第73图	第4群土器实测图③	108
第17图	I H 6号住居址出土遺物实测图①	28	第74图	第5群土器实测图①	114
第18图	I H 6号住居址出土遺物实测图②	28	第75图	第5群土器实测图②	115
第19图	I H 9号住居址及び出土遺物实测图	30	第76图	第5群土器实测图③	116
第20图	I H 12号住居址实测图	31	第77图	第6群土器实测图①	122
第21图	I H 12号住居址出土遺物实测图	32	第78图	第6群土器实测图②	123
第22图	I H 14号住居址及び出土遺物实测图	33	第79图	第6群土器实测图③	124
第23图	I H 16号住居址实测图	34	第80图	第6群土器实测图④	125
第24图	I H 16号住居址出土遺物实测图①	35	第81图	第7群土器实测图①	132
第25图	I H 16号住居址出土遺物实测图②	36	第82图	第7群土器实测图②	133
第26图	I H 27号住居址实测图	37	第83图	第7群土器实测图③	134
第27图	I H 27号住居址出土遺物实测图	38	第84图	第8群土器实测图①	140
第28图	III H 33号住居址实测图	39	第85图	第8群土器实测图②	142
第29图	III H 33号住居址出土遺物实测图①	39	第86图	第9群土器实测图①	143
第30图	III H 33号住居址出土遺物实测图②	40	第87图	第9群土器实测图②	144
第31图	III H 41号住居址及び出土遺物实测图	41	第88图	第9群土器实测图③	145
第32图	III H 30号住居址实测图	42	第89图	第9群土器实测图④	146
第33图	III H 30号住居址出土遺物实测图①	43	第90图	第9群土器实测图⑤	147
第34图	III H 30号住居址出土遺物实测图②	44	第91图	第10群土器实测图	153
第35图	III H 34号住居址及び出土遺物实测图	45	第92图	石器凡例图	164
第36图	III H 35号住居址实测图	47	第93图	遺構外出土石器①	165
第37图	III H 35号住居址出土遺物实测图①	47	第94图	遺構外出土石器②	166
第38图	III H 35号住居址出土遺物实测图②	48	第95图	遺構外出土石器③	167
第39图	III H 36号住居址及び出土遺物实测图	50	第96图	遺構外出土石器④	168
第40图	III H 37·38号住居址及び出土遺物实测图	51	第97图	遺構外出土石器⑤	169
第41图	III H 40号住居址实测图	52	第98图	遺構外出土石器⑥	170
第42图	III H 40号住居址出土遺物实测图	53	第99图	遺構外出土石器⑦	171
第43图	IV H 12·16号住居址实测图	55	第100图	遺構外出土石器⑧	172
第44图	III区縄文时代遺構全体图	56	第101图	遺構外出土石器⑨	173
第45图	I D 1·2·3·4·6号土坑实测图	58	第102图	遺構外出土石器⑩	174
第46图	I D 7·11·12·15·17·20号土坑实测图	59	第103图	遺構外出土石器⑪	175
第47图	II D 22·23·74号土坑实测图	61	第104图	遺構外出土石器⑫	176
第48图	III D 2·3·9·27A·35·37·38号土坑实测图	63	第105图	遺構外出土石器⑬	177
第49图	III D 36·39A·39B号土坑实测图	65	第106图	遺構外出土石器⑭	178
第50图	III D 40·41·42·47号土坑实测图	67	第107图	遺構外出土石器⑮	179
第51图	III D 44·48·53·55·56·57号土坑实测图	69	第108图	遺構外出土石器⑯	180
第52图	III D 60·61·62·72·77·78·80号土坑实测图	71	第109图	遺構外出土石器⑰	181
第53图	III D 79·89·93·94·95·96号土坑实测图	72	第110图	遺構外出土石器⑱	182
第54图	IV D 6·7·8·9·10·11号土坑实测图	74	第111图	遺構外出土石器⑲	183
第55图	IV D 12·14·15·16·18·20号土坑实测图	76	第112图	遺構外出土石器⑳	184
第56图	IV D 21·23·25·26·27号土坑实测图	78	第113图	遺構外出土石器㉑	185
第57图	IV D 22·29·30·31·32·33·35号土坑实测图	79	第114图	遺構外出土石器㉒	186

第115図	遺構外出土石器㉔	187
第116図	遺構外出土石器㉕	188
第117図	遺構外出土石器㉖	189
第118図	遺構外出土石器㉗	190
第119図	遺構外出土石器㉘	191
第120図	遺構外出土石器㉙	192
第121図	遺構外出土石器㉚	193
第122図	遺構外出土石器㉛	194
第123図	遺構外出土石器㉜	195
第124図	遺構外出土石器㉝	196
第125図	遺構外出土石器㉞	197
第126図	遺構外出土石器㉟	198
第127図	遺構外出土石器㊱	199
第128図	遺構外出土石器㊲	200
第129図	遺構外出土石器㊳	201
第130図	遺構外出土石器㊴	202
第131図	遺構外出土石器㊵	203

第132図	遺構外出土石器㊶	204
第133図	遺構外出土石器㊷	205
第134図	遺構外出土石器㊸	206
第135図	遺構外出土石器㊹	207
第136図	遺構外出土石器㊺	208
第137図	遺構外出土石器㊻	209
第138図	遺構外出土石器㊼	210
第139図	遺構外出土石器㊽	211
第140図	遺構外出土石器㊾	212
第141図	遺構外出土石器㊿	213
第142図	遺構外出土石器①	214
第143図	遺構外出土石器②	215
第144図	遺構外出土石器③	216
第145図	遺構外出土石器④	217
第146図	遺構外出土石器⑤	218
第147図	石製品・土製品実測図	219

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	旧石器観察表	13
第3表	I H 1号住居址出土遺物観察表①	18
第4表	I H 1号住居址出土遺物観察表②	20
第5表	I H 2号住居址出土遺物観察表	21
第6表	I H 4号住居址出土遺物観察表①	24
第7表	I H 4号住居址出土遺物観察表②	26
第8表	I H 6号住居址出土遺物観察表①	28
第9表	I H 6号住居址出土遺物観察表②	29
第10表	I H 9号住居址出土遺物観察表	30
第11表	I H 12号住居址出土遺物観察表	33
第12表	I H 14号住居址出土遺物観察表	34
第13表	I H 16号住居址出土遺物観察表	36
第14表	I H 27号住居址出土遺物観察表	38
第15表	Ⅲ H 33号住居址出土遺物観察表	40
第16表	Ⅲ H 41号住居址出土遺物観察表	41
第17表	Ⅲ H 30号住居址出土遺物観察表①	43
第18表	Ⅲ H 30号住居址出土遺物観察表②	44
第19表	Ⅲ H 34号住居址出土遺物観察表	46
第20表	Ⅲ H 35号住居址出土遺物観察表①	46
第21表	Ⅲ H 35号住居址出土遺物観察表②	49
第22表	Ⅲ H 36号住居址出土遺物観察表	49
第23表	Ⅲ H 38号住居址出土遺物観察表	51
第24表	Ⅲ H 40号住居址出土遺物観察表	52
第25表	土坑出土遺物観察表①	83
第26表	土坑出土遺物観察表②	84
第27表	土坑出土遺物観察表③	85
第28表	土坑出土遺物観察表④	86
第29表	第1群土器観察表	88
第30表	第2群土器観察表①	95
第31表	第2群土器観察表②	96
第32表	第2群土器観察表③	97
第33表	第2群土器観察表④	98
第34表	第2群土器観察表⑤	99
第35表	第2群土器観察表⑥	100
第36表	第2群土器観察表⑦	101
第37表	第3群土器観察表①	104
第38表	第3群土器観察表②	105
第39表	第4群土器観察表①	109
第40表	第4群土器観察表②	110

第41表	第4群土器観察表③	111
第42表	第4群土器観察表④	112
第43表	第5群土器観察表①	117
第44表	第5群土器観察表②	118
第45表	第5群土器観察表③	119
第46表	第5群土器観察表④	120
第47表	第5群土器観察表⑤	121
第48表	第6群土器観察表①	126
第49表	第6群土器観察表②	127
第50表	第6群土器観察表③	128
第51表	第6群土器観察表④	129
第52表	第6群土器観察表⑤	130
第53表	第6群土器観察表⑥	131
第54表	第7群土器観察表①	135
第55表	第7群土器観察表②	136
第56表	第7群土器観察表③	137
第57表	第7群土器観察表④	138
第58表	第8群土器観察表①	141
第59表	第8群土器観察表②	142
第60表	第9群土器観察表①	148
第61表	第9群土器観察表②	149
第62表	第9群土器観察表③	150
第63表	第9群土器観察表④	151
第64表	第9群土器観察表⑤	152
第65表	第10群土器観察表	154
第66表	遺構外出土石器観察表①	219
第67表	遺構外出土石器観察表②	220
第68表	遺構外出土石器観察表③	221
第69表	遺構外出土石器観察表④	222
第70表	遺構外出土石器観察表⑤	223
第71表	遺構外出土石器観察表⑥	224
第72表	遺構外出土石器観察表⑦	225
第73表	遺構外出土石器観察表⑧	226
第74表	遺構外出土石器観察表⑨	227
第75表	遺構外出土石器観察表⑩	228
第76表	遺構外出土石器観察表⑪	229
第77表	遺構外出土石器観察表⑫	230

写 真 図 版

- | | |
|---|---|
| <p>図版1 遺構外出土遺物 旧石器①
 図版2 遺構外出土遺物 旧石器②
 図版3 ①IH1号住居址全景
 ②IH1号住居址内土坑
 図版4 ①IH2号住居址全景
 ②IH4号住居址全景
 図版5 ①IH6号住居址全景
 ②IH6号住居址遺物出土状況
 図版6 ①IH9号住居址全景
 ②IH12・14号住居址全景
 図版7 ①IH16号住居址全景
 ②IH27号住居址全景
 図版8 ①IIIH33・37・38号住居址全景
 ②IIIH41号住居址全景
 図版9 ①IIIH30号住居址全景
 ②IIIH30号住居址炉全景
 図版10 ①IIIH34号住居址全景
 ②IIIH34号住居址炉全景
 図版11 ①IIIH35号住居址全景
 ②IIIH35号住居址炉全景
 図版12 ①IIIH40号住居址全景
 ②IIIH40号住居址遺物出土状況
 図版13 ①IIIH40号住居址炉全景
 ②IIIH40号住居址炉掘り方全景
 図版14 ①IVH12号住居址全景
 ②IVH16号住居址全景
 図版15 ①ID1・2・3号土坑
 ②ID6号土坑
 ③ID7号土坑
 ④ID11A・B号土坑
 ⑤ID12号土坑
 ⑥ID15号土坑
 ⑦ID17号土坑
 ⑧ID20号土坑
 図版16 ①IID22号土坑
 ②IID23号土坑
 ③IID74号土坑
 ④IIID3号土坑
 ⑤IIID27A号土坑
 ⑥IIID36・37・38号土坑
 ⑦IIID39A・B号土坑
 ⑧IIID40号土坑</p> | <p>図版17 ①IIID41号土坑
 ②IIID42号土坑
 ③IIID44号土坑
 ④IIID47号土坑
 ⑤IIID48号土坑
 ⑥IIID53号土坑
 ⑦IIID55・56・57号土坑
 ⑧IIID60号土坑
 図版18 ①IIID61号土坑
 ②IIID62号土坑
 ③IIID72号土坑
 ④IIID77・78・79号土坑
 ⑤IIID89号土坑
 ⑥IVD6号土坑
 ⑦IVD7号土坑
 ⑧IVD8号土坑
 図版19 ①IVD9・10号土坑
 ②IVD11・12号土坑
 ③IVD14号土坑
 ④IVD16号土坑
 ⑤IVD18号土坑
 ⑥IVD20号土坑
 ⑦IVD21号土坑
 ⑧IVD22・23号土坑
 図版20 ①IVD25・26号土坑
 ②IVD27号土坑
 ③IVD29号土坑
 ④IVD30号土坑
 ⑤IVD32・33号土坑
 ⑥IVD36号土坑
 ⑦IVD39号土坑
 ⑧IVD40号土坑
 図版21 ①J区埋没谷セクション
 ②J区埋没谷調査風景
 図版22 IH1号住居址出土遺物①
 図版23 IH1号住居址出土遺物②
 図版24 IH1号住居址出土遺物③
 IH2号住居址出土遺物
 IH4号住居址出土遺物①
 図版25 IH4号住居址出土遺物②
 図版26 IH4号住居址出土遺物③
 図版27 IH4号住居址出土遺物④
 IH16号住居址出土遺物①</p> |
|---|---|

图版28 I H 6 号住居址出土遺物②
I H 9 号住居址出土遺物
I H12号住居址出土遺物①
图版29 I H12号住居址出土遺物②
I H14号住居址出土遺物
I H16号住居址出土遺物①
图版30 I H16号住居址出土遺物②
I H27号住居址出土遺物
图版31 III H33号住居址出土遺物
III H30号住居址出土遺物①
图版32 III H30号住居址出土遺物②
III H41号住居址出土遺物
III H34号住居址出土遺物
图版33 III H35号住居址出土遺物①
图版34 III H35号住居址出土遺物②
III H36号住居址出土遺物
III H38号住居址出土遺物
III H40号住居址出土遺物①
图版35 III H40号住居址出土遺物②
土坑出土遺物①
图版36 土坑出土遺物②
图版37 土坑出土遺物③
图版38 土坑出土遺物④
图版39 第1群土器
第2群土器①
图版40 第2群土器②
图版41 第2群土器③
图版42 第2群土器④
图版43 第2群土器⑤
图版44 第3群土器①
图版45 第3群土器②
第4群土器①
图版46 第4群土器②
图版47 第4群土器③
图版48 第5群土器①
图版49 第5群土器②
图版50 第5群土器③
图版51 第5群土器④
第6群土器①
图版52 第6群土器②
图版53 第6群土器③
图版54 第6群土器④
图版55 第6群土器⑤
图版56 第7群土器①
图版57 第7群土器②
图版58 第7群土器③
第8群土器①

图版59 第8群土器②
图版60 第9群土器①
图版61 第9群土器②
图版62 第9群土器③
图版63 第9群土器④
第10群土器
图版64 遺構外出土石器①
图版65 遺構外出土石器②
图版66 遺構外出土石器③
图版67 遺構外出土石器④
图版68 遺構外出土石器⑤
图版69 遺構外出土石器⑥
图版70 遺構外出土石器⑦
图版71 遺構外出土石器⑧
图版72 遺構外出土石器⑨
图版73 遺構外出土石器⑩
图版74 遺構外出土石器⑪
图版75 遺構外出土石器⑫
图版76 遺構外出土石器⑬
图版77 遺構外出土石器⑭
图版78 遺構外出土石器⑮
图版79 遺構外出土石器⑯
图版80 遺構外出土石器⑰
图版81 遺構外出土石器⑱
图版82 遺構外出土石器⑲
图版83 遺構外出土石器⑳
图版84 遺構外出土石器㉑
图版85 遺構外出土石器㉒
图版86 遺構外出土石器㉓
图版87 遺構外出土石器㉔
图版88 遺構外出土石器㉕
图版89 遺構外出土石器㉖
图版90 遺構外出土石器㉗
图版91 遺構外出土石器㉘
图版92 遺構外出土石器㉙
图版93 遺構外出土石器㉚
图版94 遺構外出土石器㉛
图版95 遺構外出土石器㉜
图版96 遺構外出土石器㉝
图版97 遺構外出土石器㉞
图版98 遺構外出土石器㉟
图版99 遺構外出土石器㊱
图版100 遺構外出土石器㊲
图版101 遺構外出土石器㊳
图版102 遺構外出土石器㊴
图版103 遺構外出土石器㊵
图版104 遺構外出土石器㊶

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯と経過

榛名平遺跡が所在する佐久市は長野県の東端に位置し、北は千曲川を下り長野そして上越に、南は野辺山を越え山梨へ、そして東は碓氷峠を越えて群馬・関東へとつながる、まさしく古代から現代に至るまで交通の要として知られてきた地である。

佐久市においては平成5年3月、待望の上信越自動車道が佐久インターチェンジまで開通し、また平成10年2月の「長野冬季オリンピック」開催に向け長野新幹線の工事本格的に始まり、いよいよ高速交通網時代に入ろうとしていた。当時この様な中で関東からの「日帰り圏内」になる佐久平周辺では新たな観光拠点の整備が急務であった。その為、佐久市では市の東側山麓の観光拠点として上信越自動車道佐久平パーキングと併設するスキー場 佐久スキーガーデン「パラダ」並びに「平尾山公園」等の整備を民間活力を得て建設に着手していた。そして、今後計画が進むであろう「中部横断自動車道」の市内南出口である蓼科山麓側にも新たな観光スポットの計画が望まれていた。そのような中、財団法人厚生年金事業振興団による厚生年金保険福祉施設建設が佐久市大字根岸に計画された。県内では松本に続く2つ目の施設「サンピア佐久」である。

財団法人厚生年金事業振興団より施設用地の取得・造成を依頼された長野県土地開発公社は、平成4年に佐久市教育委員会に当地籍の遺跡の有無についての照会を行った。教育委員会では予定地に榛名平遺跡群・坪の内遺跡群・坪の内古墳が存在することを回答した。よって、長野県土地開発公社と当教育委員会で保護協議を行った結果、平成5年より試掘調査を行い遺跡の存在する部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。



第1図 榛名平遺跡位置図 (1：100,000)

第2節 調査体制 平成5～12年度

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	大井季夫（平成7年6月退任） 依田英夫（平成7年7月就任）
事務局	教育次長		奥原秀雄（平成5～6年度） 市川 源（平成7～9年度） 北沢 馨（平成10年度）
	埋蔵文化財課長		上原正秀（平成5年度） 戸塚 満（平成6～7年度） 北沢元平（平成8年度） 須江仁胤（平成9～10年度）
	埋蔵文化財管理係長		小林泰子（平成5年度） 谷津恭子（平成6～7年度） 棚沢慶子（平成8～9年度）
	埋蔵文化財管理係		田村和広（平成6～8年度）
	埋蔵文化財係長		草間芳行（平成5～6年度） 大塚達夫（平成7～9年度） 荻原一馬（平成10年度）
	埋蔵文化財係		林幸彦 高村博文（平成5～6年度） 三石宗一（平成5～10年度） 須藤隆司 小林真寿 羽毛田卓也 富沢一明 上原学
調査受託者	佐久市教育委員会		（平成11年度より組織改正により文化財課に課名変更）
	教育長		依田英夫
事務局	教育次長		小林宏造
	文化財課長		草間芳行
	文化財係長		荻原一馬
	文化財係		林 幸彦 須藤隆司 小林真寿 羽毛田卓也 富沢一明 上原 学 山本秀典 出澤 力



調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子			
調査副主任	堺 益子				
調査員	浅沼ノブ江	阿部和人	荒井利男	荒井ふみ子	池田豊子
	磯貝はな	市川愛子	市川チイ子	井出愛子	井出つねじ
	伊藤 理	井上行雄	今井みさ子	岩下吉代	岩下友子
	岩下文字	上野よし子	上原幸子	梅澤淳子	江原富子
	遠藤しづか	碓氷 健	大井キセ	大井みつる	小田川 栄
	小野沢健二	小幡弘子	掛川ますい	柏原松江	江元好雄
	勝山克世	金森治代	金子みよし	川多アヤ子	木内よし子
	菊池喜重	工藤しず子	倉見 渡	幸崎真理	神津ツネヨ
	神津よしの	輿石しげ子	小須田サクエ	小林幸子	小林立江
	小林武志	小林淳子	小林まさ子	小林陽子	小林よしみ
	齋藤義男	齋藤真理	佐久本眞樹子	櫻井聖仁	佐藤愛子
	佐藤玉枝	佐藤明子	篠崎清一	篠原昭子	篠原孝子
	島田幹子	清水佐知子	清水六郎	白井をくに	須藤瑞帆
	関口 正	高瀬武男	高梨け二三	高橋ふみ	竹重祐夫
	武田千里	武田まつ子	田中章雄	田中ひさ子	堤ときよ
	角田すづ子	角田 時	角田トミエ	角田良夫	東城友子
	東城幸子	徳田代助	伴野甚三郎	樋田咲枝	中島とも子
	中嶋良造	並木おとみ	成澤富子	荻原宮子	橋詰勝子
	橋詰けさよ	橋詰信子	橋詰ヨシ江	花岡美津子	花岡文夫
	花里香代子	花里きしの	花里四之助	花里三佐子	花里八重子
	原キミエ	細萱ミスズ	堀籠滋子	堀込成子	堀籠 因
	堀籠みさと	真嶋保子	増永佐代子	増野深志	丸山 澄
	丸山美津子	三石和子	宮川百合子	宮本宣子	水間雅義
	村松とみ	茂木とよ子	桃井もとめ	森角雅子	山口丑男
	柳沢孝子	柳沢ちなみ	柳沢豊志子	山浦豊子	山崎さきの
	山崎平八郎	山村容子	横山みよ子	依田三枝子	依田みち
	若林 希	和久井義雄	渡邊久美子	渡邊倍男	



第3節 調査日誌

平成5年度

平成5年4月19日～5月27日 試掘調査

- 7月21日 台地先端Ⅰ区より本調査開始
- 10月4日 調査区中央部分Ⅱ区調査開始
2班体制となる。
- 10月18日 坪の内古墳調査開始
5班体制となる。
- 10月21日 浅間山初冠雪
- 11月17日 調査区上段Ⅲ・Ⅳ区調査開始
7班体制となる。
- 12月7日 全班による遺構確認
- 12月18日 調査区東側半分航空測量
- 平成6年1月6日 現場において仕事始め
- 1月14日 佐久地方に大雪
- 2月1日～28日 室内作業
- 3月1日 現場作業再開
- 3月22日 一部を残しⅠ・Ⅱ区調査終了

平成6年度

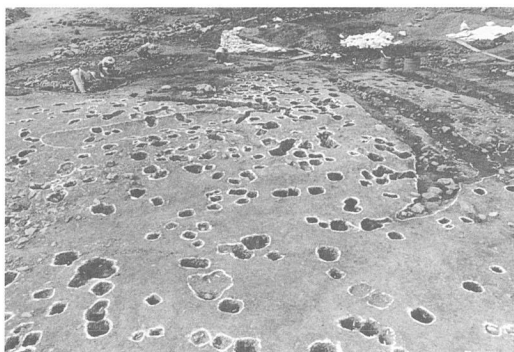
- 平成6年4月5日 Ⅲ・Ⅳ区調査開始
中世土壌墓群を調査
- 4月10日 沓沢区遺跡見学会
- 5月7日 道路分調査開始
- 6月18日 榛名平1号墳ラジコン撮影
- 7月15日 調査終了機材撤収を行う。
- 12月6日 土器洗浄を始める。

整理作業は平成7年から平成10年度まで断続的に実施し、本格的な報告書作成は平成11年度より行った。

- 平成7～8年度 注記・木製品保存処理・人骨鑑定
- 平成9～10年度 土器復元・図面修正・獣骨鑑定
- 平成11年度 遺物実測・写真撮影・樹種・種子同定
- 平成12年度 図版作成・原稿執筆



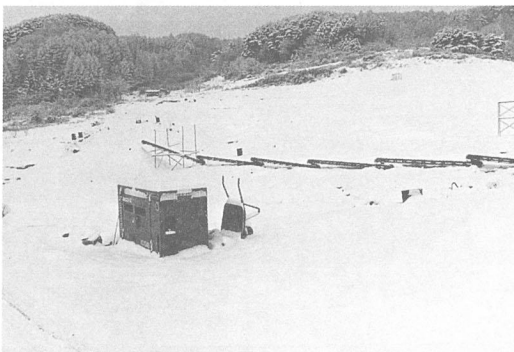
遺跡表土剥ぎ



Ⅱ区中世ピット群



埋没谷調査風景



雪に埋もれる遺跡

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

佐久平は長野県内を流れる大河千曲川の上流部に位置し、浅間山・八ヶ岳・荒船山などの山々に囲まれた海拔700mを平均とする盆地である。この盆地の中央部には南から千曲川が先の山々から流れ出た湯川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め北流している。佐久平の地形は大きく北と南で異なる。北側は浅間山の火山活動により形成された火山灰台地が浅間山麓より広がり、特に佐久市長土呂・小諸市耳取付近では火山灰台地特有の「田切り」地形が発達している。これとは趣を異にして、南側は蓼科・八ヶ岳山麓から筋状に延びる尾根とそれら尾根の谷筋より流れ出る小河川が造り出す小規模な扇状地と千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積低地が広がり、のどかな水田風景が広がっている。

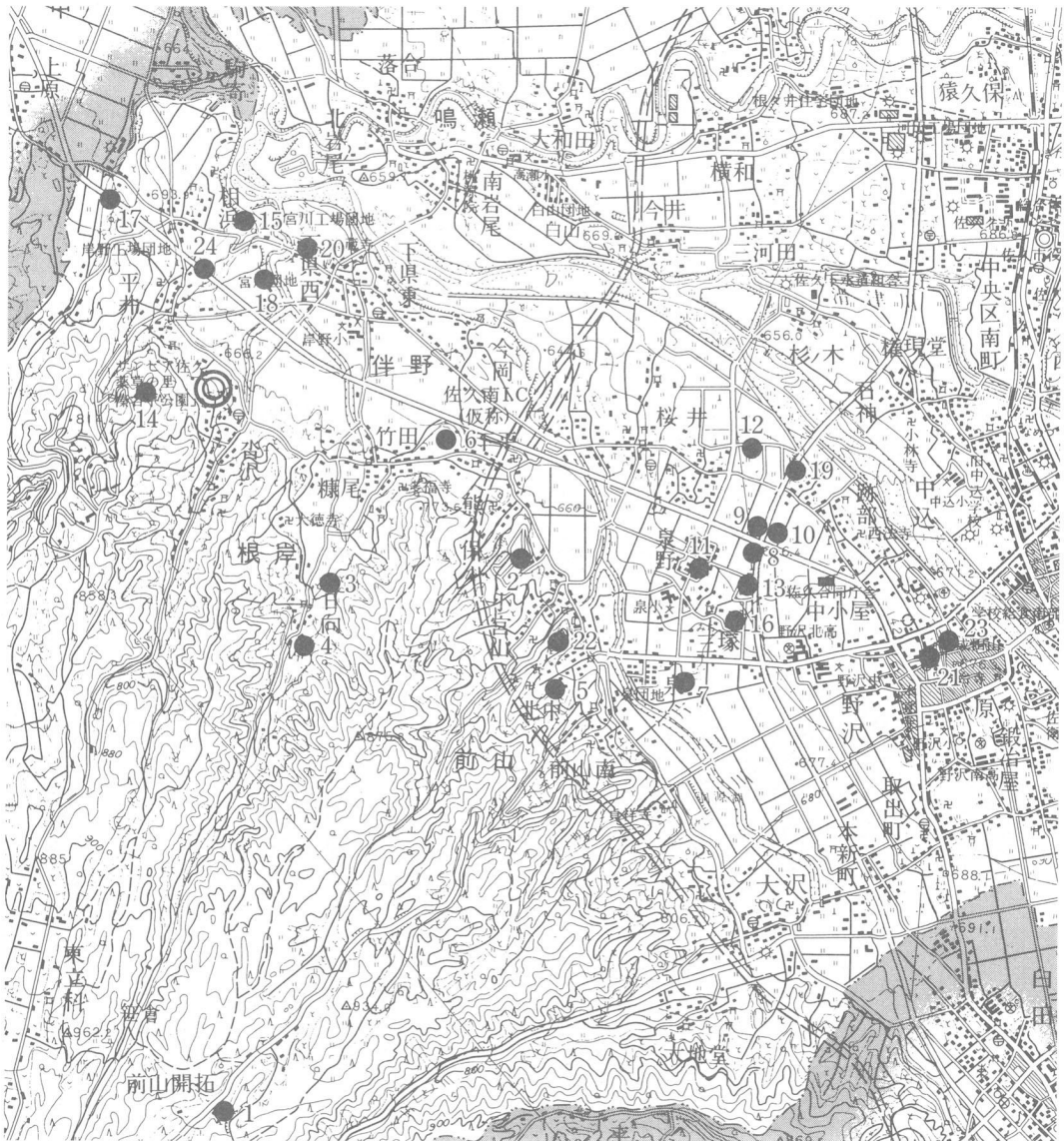
榛名平遺跡はこの佐久平の西端、佐久市根岸に所在する。遺跡の地形は蓼科山麓末端の西から東へ傾斜する丘陵地形であり、千曲川の支流である宮川や中沢川を見下ろす台地先端に遺跡は立



遺跡より北に浅間山を望む

地する。台地の標高は突端部で海拔687m、水田地帯との標高差は約23mを測る。この台地の地質は基盤層より「相浜層」「凝灰角礫岩層」「ローム層」である。この内、相浜層は新生代第四紀洪積世に八ヶ岳蓼科山の噴出物により堰き止められた千曲川が淡水湖を造り湖底において堆積層を形成した地層で、凝灰砂岩と凝灰頁岩とが交互に水平堆積している。またこの相浜層中からはナウマン象の歯・鹿角・メタセコイヤ・さわら・とうひなどの化石が発見されている。凝灰角礫岩層とローム層はいずれも蓼科火山の噴出火山灰である。

榛名平遺跡の遺構はこれら相浜層やローム層を掘り込んで構築されており、傾斜面という条件も合わせ遺構の残存状態は良くなかった。



第2図 榛名平遺跡周辺遺跡位置図 (1 : 50,000)

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する根岸地籍及びその周辺の野沢・前山・小宮山・桜井地区には、東に傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡南西方向5kmの八ヶ岳北東山麓中に立科F遺跡(1)がある。本遺跡からは211点からなる石器群が検出され、検出層位より31200年±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡としては、草創期の遺物として当遺跡より御子柴型槍先形尖頭器が出土している。次に前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡(2)、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡(3)、筒村B・山法師B遺跡(4)などがある。また、前山地籍の瀧の下遺跡(5)からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山地沿いの谷間か、水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、水田面を見下ろす丘陵上に位置する後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、当遺跡と同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡(6)からは中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。また、当遺跡からは、円形周溝墓と考えられる遺構も確認されており、後沢遺跡も含め小地域内での墓制の多様性を考える上で貴重な資料となっている。

古墳時代になると集落・生産・墳墓等の遺跡が調査されている。古墳時代集落は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、中道遺跡(7)・市道遺跡Ⅰ・Ⅱ(8)・三塚町田遺跡(9)・跡部町田遺跡(10)・三塚鶴田遺跡(11)・上桜井北遺跡(12)・寺添遺跡(16)などが挙げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており中期後半から後期におよぶ集落址である。また、近年沖積地において空白であった前期土器群が宮添遺跡(13)で出土し、今後は周辺域で集落発見の期待がかかる。古墳址は調査されたものは少ないが、まず瀧の峯古墳群(14)が上げられる。市志編纂事業の一環として学術調査が行われ、2基の前方後方型の墳丘墓が検出された。規模は2号墳が全長18m・1号墳が約13mを測り、2号墳からは後方部中央に主体部として土壇墓が確認されている。また2号墳の周溝内からは壺・小型壺・甕・鉢・高坏・器台が出土し、これら土器群をもって4世紀後半の位置づけがなされている。次に後期古墳としては調査されたものは少なく当遺跡の榛名平1号墳と坪の内古墳にとどまっているが、火の雨塚古墳(15)からは円筒と靱などの埴輪片が出土している。なお、佐久平においては千曲川西岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川東岸の山裾に群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。次に生産遺跡として石附窯址群(17)が挙げられる。数次の調査が行われ現在迄に2基の須恵器窯と5

基の木炭窯が検出されている。これら窯址の年代は出土須恵器より7世紀後半～末の実年代が与えられている。

次に、奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し山裾には小規模な集落址が、沖積地においては舞台場遺跡(18)の29軒や跡部儘田遺跡(19)の古墳時代も含め約70軒とう集落規模が大きくなる。特に跡部儘田遺跡からは砂層に埋没した住居址や畝状遺構、そして砂層上に構築された竪穴住居址等が発見され、それら遺構の帰属時期がいわゆる「仁和の水害」に関連するようであり今後の本報告が待たれる。また墓址としては休石遺跡(20)があり、大甕3個の中に長頸壺・甕の蔵骨器が入って発見され、時期は10～12世紀の火葬墓群と考えられている。出土遺物としては中道遺跡と榛名平遺跡から奈良三彩の蓋が、後沢遺跡からは緑釉陶器が出土しており注目される。

鎌倉時代以降になると当地域では伴野氏の活躍が始まる。方形の区画を持つ野沢館跡(21)や山城として良好な保存状態を保つ前山城跡(22)は伴野氏によって築かれたものとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野市の活況な様子が描かれている。また、近年、大字原の薬師寺遺跡(23)が調査され、近世前期よりの寺院址が調査されている。遺物としては小金平遺跡(24)から常滑の甕に入った備蓄銭約14,400枚が出土している。ただ、岩村田・長土呂地籍に比べ当地域での中世遺構の発掘例は少なく、大規模なものとしては今回の榛名平遺跡が初例である。

以上、榛名平遺跡周辺の調査された遺跡をもとに歴史的環境を概観した。

No.	遺跡名	所在地	立地	概要	調査月日
1	立科F遺跡	前山字立科	山地	9つのブロック	平成2年
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	縄文前期(関山)・弥生後期・方形周溝墓	昭和51・52年
3	中村遺跡	根岸字日向	山地	縄文中期後半(曾利Ⅱ～Ⅴ)集落	昭和57年
4	筒村B・山法師B遺跡	根岸字日向	山地	縄文中期後半(曾利Ⅳ)集落	平成2・3年
5	瀧の下遺跡	前山字滝の下	丘陵	縄文後期集落	平成2年
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西裏・竹田峯	丘陵先端	弥生後期・古墳中期集落	昭和60年
7	中道遺跡	前山字中道	沖積微高地	古墳後期・平安集落	昭和46年
8	市道遺跡	三塚字市道	沖積微高地	古墳後期～平安集落	昭和49年
9	三塚町田遺跡	三塚字町田	沖積微高地	古墳後期～平安集落	昭和50年
10	跡部町田遺跡	跡部字町田	沖積微高地	古墳後期～平安集落	昭和46年
11	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	沖積微高地	古墳後期～平安集落	昭和50年
12	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	沖積微高地	古墳後期～平安集落	昭和52年
13	宮添遺跡	三塚字宮添	沖積微高地	古墳前期・後期・中世	平成11年
14	瀧の峯古墳群	根岸字瀧の峯	山地	弥生末～古墳初頭墳丘墓	昭和61年
15	火の雨塚古墳	伴野字唐松坂	河岸段丘	古墳後期	
16	寺添遺跡	三塚字寺添	沖積微高地	古墳中期～平安集落	平成6年
17	石附古窯址群	根岸字石附	丘陵	須恵器・木炭窯跡	昭和56年
18	舞台場遺跡	根岸字反り田	河岸段丘	古墳中期・平安集落	昭和56年
19	跡部儘田遺跡	跡部字儘田	河岸段丘	古墳後期・平安集落	平成11年
20	休石遺跡	伴野字休石	沖積地	平安後期火葬墓群	昭和53年
21	野沢館跡	野沢字居屋敷・北田	沖積微高地	中世区画館跡	
22	前山城跡	小宮山字城山	山地	山城	
23	薬師寺遺跡	野沢字屋敷	沖積微高地	近世中期の寺院	平成11年
24	小金平遺跡	根岸字小金平	丘陵	縄文前期・平安集落	

第1表 周辺遺跡一覧

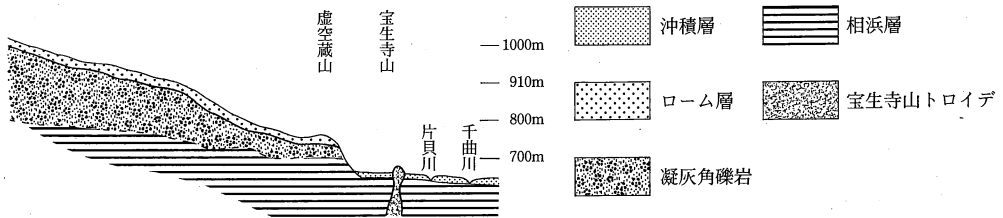


第3図 榛名平遺跡周辺地形図 (1 : 10,000)

第三章 基本層序と概要

第1節 基本層序

本遺跡における基本土層は調査地点により異なるが基本的に3層に分かれる。まず調査地点の内上部の海拔700m付近ではローム層が確認され遺構の確認面となった。次に海拔690m付近においての遺構確認面は褐色の粘土層であり凝灰角礫岩層とローム層の中間層として捉えられる。台地先端は耕作土下がすぐに相浜層であった。



第4図 遺跡付近地質断面想像図（岸野村史掲載図参考）

第2節 検出遺構・遺物の概要

検出遺構

縄文時代 (黄色)	竪穴住居址	10軒 (前期中葉10・後葉2・中期初頭1・後半7)	古墳時代 (青)	竪穴住居址	10軒 (中期後半)
	土坑	75基		掘立柱建物址	3棟
弥生時代 (赤)	埋没谷	2カ所	溝状遺構	1本	
	竪穴住居址	29軒 (弥生後期～古墳初頭)	古墳跡	2基	
	掘立柱建物址	1棟	中世・近世 (黒)	竪穴状遺構	37軒
	土坑	15基		掘立柱建物址	14棟
	方形周溝墓	1基		ピット	5700基
埋没谷	1カ所	溝状遺構		95本	
奈良・平安時代 (緑)	竪穴住居址	63軒	井戸址	7基	
	掘立柱建物址	12棟	土坑	103基	
	土坑	60基	墳墓群	65基	
	溝状遺構	10本	近世神社跡	1カ所	
	小鍛冶遺構	1基			
	土墳墓	1基			
	方形区画遺構	1カ所			

出土遺物

ナイフ型石器・縄文土器(前期初頭・前期中葉・前期後葉・中期初頭・中期中葉・中期後半・後期前半)・石器・石製品・土製品
 弥生土器(箱清水)・磨製石鏃・土師器・須恵器・鉄製品(紡錘車・鉄鏃・刀子)・ガラス小玉・銀張銅芯製耳環・白玉
 奈良三彩・青磁・白磁・中世陶器(瀬戸・美濃・古瀬戸)・内耳鍋・カワラケ・五輪塔・白・播鉢・砥石
 木製品(漆碗・箸・下駄・建築部材)・古銭

榛名平遺跡



第5図 榛名平遺跡調査全体図

第Ⅳ章 旧石器時代の遺物

第1節 遺物

榛名平遺跡からは19点の旧石器及びその可能性のある剥片が出土している。出土地点は8点がI区とJ区を中心とする東斜面から、4点がF区を中心とする北斜面から出土している。出土層位はすべてが縄文土器を包含する褐色土層や泥炭層或いは中世遺構の覆土からであり、石器本来の原位置を確認できる出土状態ではなかった。出土した石器石材は16点が黒曜石、ガラス質黒色安山岩が1点、チャートが2点含まれていた。石器はいずれも縦長剥片を素材とするものであり、器種は2点が定型化したナイフ形石器、8点在使用痕のある剥片（微細剥離痕）の確認できるもの、5点が二次加工剥片、4点が剥片であった。

以上の出土状態から本遺跡の石器群に関して一括性は不明な点が多く、時期の決定や遺跡の性格等への論究は困難である。

番号	器種	出土位置	層位	素材	形態	技術	剥離方向	剥離面	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重さ (g)	備考
1	ナイフ	II D27	床面	縦長	基部加工	WHHP	正	急角度	黒曜石	30.0	19.0	5.0	1.9	基部と左側辺に急角度の刃潰し加工。
2	ナイフ	J.キ.19	泥炭	縦長	基部加工	WHHP	正	急角度	黒曜石	33.0	11.0	5.0	1.6	左側基部にHPによる刃潰し加工。
3	使用痕剥片	M.イ.12		縦長					黒曜石	26.0	18.0	16.0	0.9	打面調整された打面からHIで石刃が剥離。素材上端両側にMFが顕著。
4	二次加工剥片	I.ト.12		縦長		NHHP	正	急角度	チャート	32.0	14.0	5.0	1.8	素材先端部の両側に挟りが入る。
5	剥片	H 1		縦長					黒曜石	23.0	24.0	6.0	1.6	平坦打面からHIで剥離。
6	剥片	II H22		縦長					黒曜石	25.0	11.0	3.0	0.6	平坦打面からHIで石刃が剥離。
7	使用痕剥片	J.キ.18	泥炭	縦長					黒曜石	40.0	14.0	6.0	1.5	左側辺にMF顕著。
8	使用痕剥片	J.コ.19	泥炭	縦長					黒曜石(狭維)	36.0	18.0	9.0	2.9	黒曜石の原産地が違うようである。素材末端から両側にかけてMFが顕著。礫打面を残す。
9	剥片	F.キ.13		縦長					黒曜石	37.0	10.0	6.0	1.8	
10	二次加工剥片	M 2	北半	縦長		NHHP	正	急角度	黒曜石	38.0	12.0	6.0	1.6	素材剥片末端にわずかに加工。
11	ノッチ	P 34		縦長		HP			黒曜石	29.0	10.0	7.0	0.9	
12	二次加工剥片	I.ト.12				NHHP	正と反	平坦	チャート	25.0	13.0	5.0	2.8	素材下端部欠損。
13	使用痕剥片	J.キ.20	泥炭	縦長					黒曜石	38.0	36.0	9.0	7.6	礫打面からHDで剥離。左側辺と右側末端にMFが見られる。
14	二次加工剥片	F.コ.13		縦長		NSHP	正	平坦	黒曜石(狭維)	43.0	26.0	9.0	5.8	平坦打面を残し、HDで剥離されている。素材末端辺の左側辺にMF顕著。素材先端部の基部に押圧による加工。
15	使用痕剥片	J.ア.13		縦長					黒曜石	47.0	15.0	7.0	3.9	平坦打面からHIで剥離。素材下端部の左側辺にMF顕著。
16	使用痕剥片	I.タ.8		縦長					黒曜石	52.0	24.0	11.0	6.6	切り子打面からHDで剥離。素材下端部右側にMF顕著。
17	使用痕剥片	坪の内古墳		縦長					黒曜石	55.0	36.0	11.0	14.5	平坦打面からHDで剥離。素材先端部右側辺にMFが見られる。
18	使用痕剥片	J.ア.13		縦長					黒曜石	57.0	27.0	16.0	18.9	平坦打面からHDで剥離。右側辺にMFが見られる。
19	剥片	F区		縦長					安山岩	112.0	55.0	19.0	99.6	大形の剥片で平坦打面からHDで剥離。

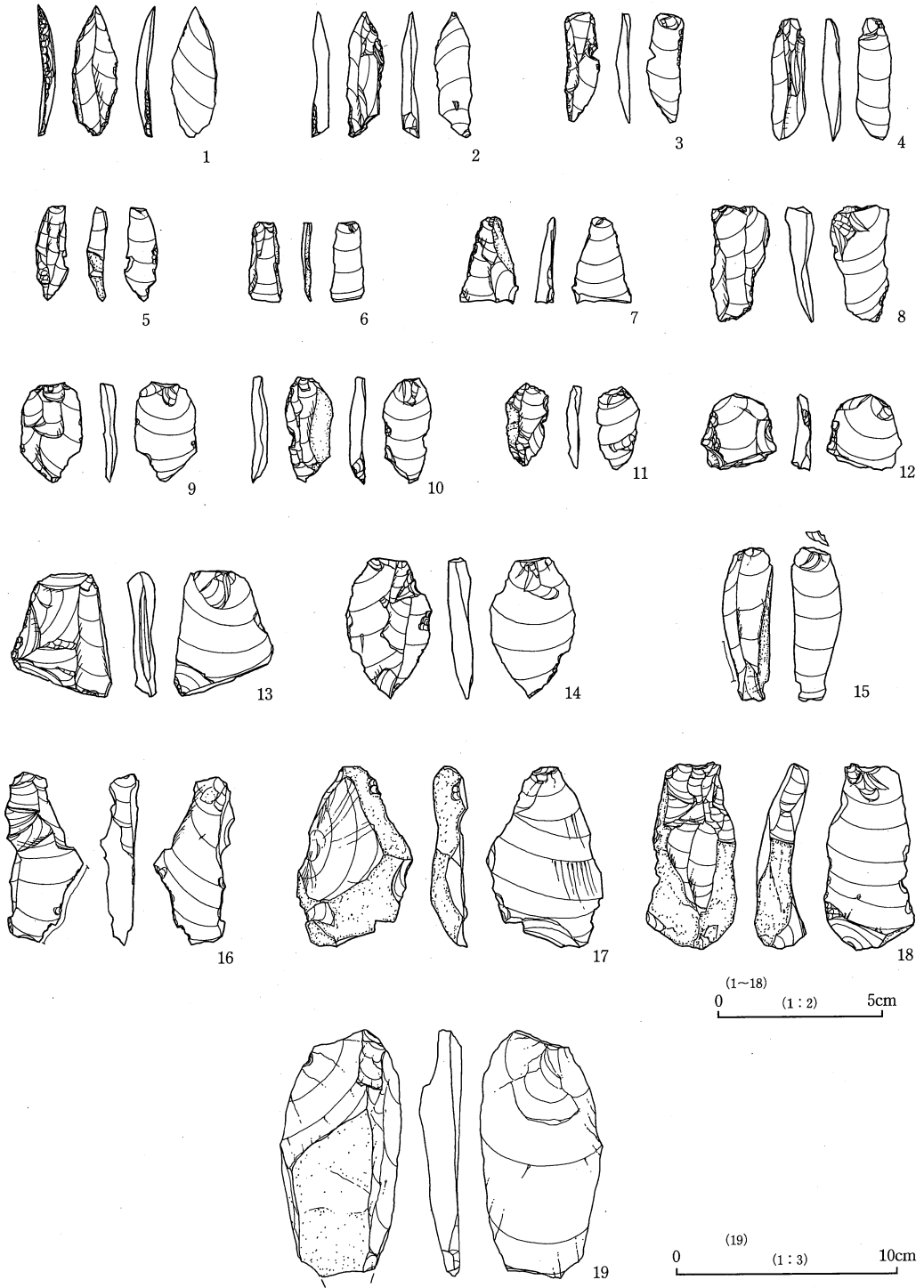
第2表 旧石器観察表

なお、榛名平遺跡からは神子柴型尖頭器が1点地元の方が採集している。14cm以上の大型の尖頭器で、石材は硬質頁岩である。

参考文献

堤 隆 1995 「第1章 旧石器時代」『佐久市志』歴史編(一) 原始古代 佐久市志刊行会

川島雅人・佐藤信之 1978 「1. 岸野榛名平遺跡の調査」『佐久考古』会報No.4 佐久考古学会



第 6 图 旧石器实测图

第V章 榛名平遺跡における縄文時代の概要

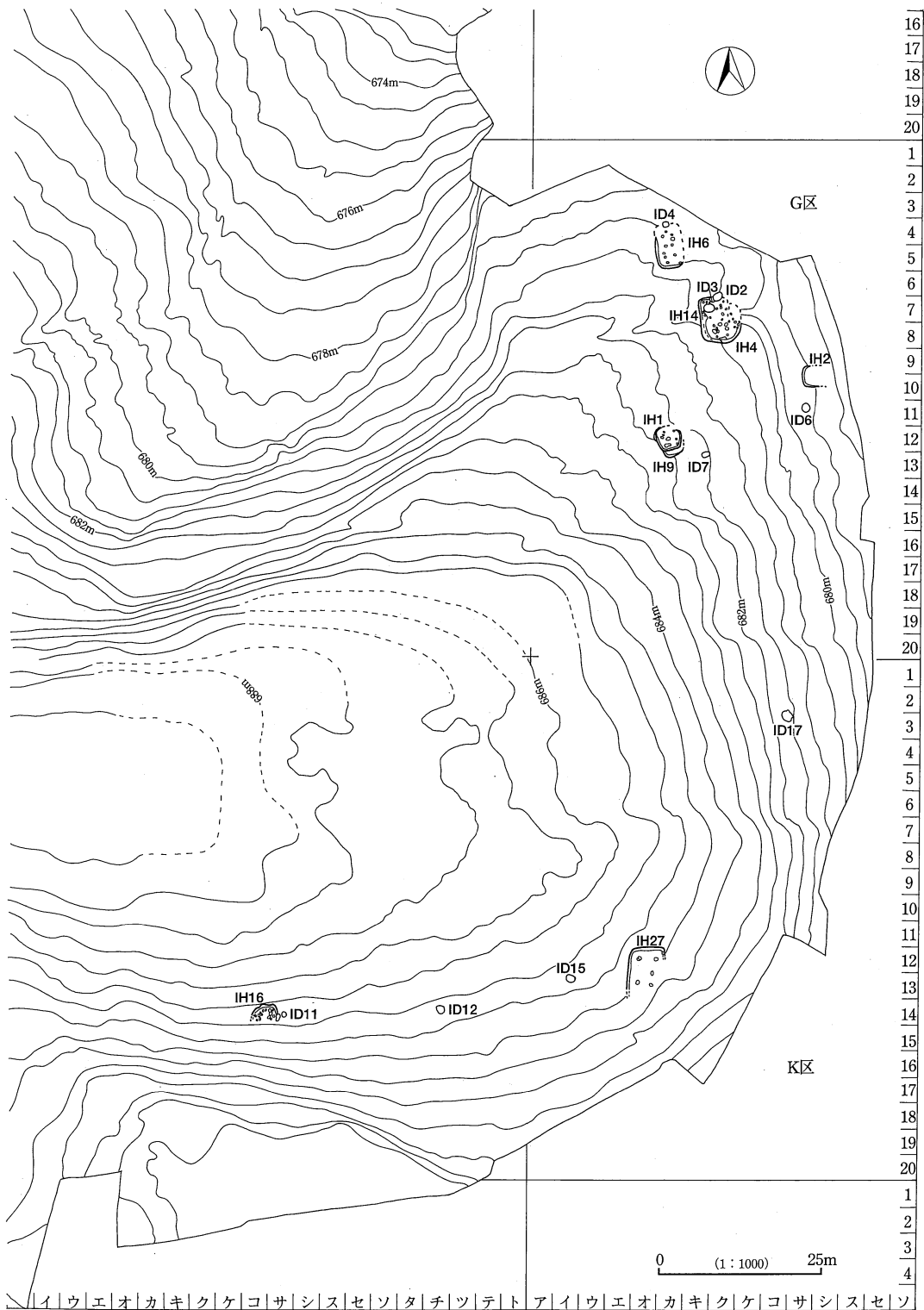
第1節 概要

榛名平遺跡における縄文時代の遺構は、竪穴住居址20軒・土坑75基・埋没谷2カ所が検出された。特に2カ所の埋没谷の遺物包含層からは多量の土器・石器が出土した。遺構の分布は主に調査区中央の台地先端であるG区と、調査区最上段の台地であるH・L区であり、弥生時代の遺構分布と重なる。

本遺跡の縄文時代竪穴住居址の所産時期は縄文前期中葉が10軒（関山Ⅱ～有尾平行）・前期後葉が2軒・中期初頭が1軒・中期後半が7軒（曾利Ⅰ～Ⅳ平行）であった。これら住居址の内、前期中葉の住居址は台地先端のG区に立地し、時期差もあまりみられず単一集落址の可能性が指摘できる。中期後半の住居址については調査区上段の台地であるH・L区より、重複が激しい状態で検出されたが、前期と異なり、その所産時期は曾利Ⅰ～Ⅳ平行までの時期差が認められた。土坑については調査区上段から多く検出された。重複する物が多く、遺物も少なかったが、大型の円形土坑は前期後葉（諸磯式）の土器片出土が多い傾向にあった。2カ所の埋没谷は調査区北側の部分が「F区埋没谷」、南側の部分が「J区埋没谷」とそれぞれ仮称した。詳細については第IV章第3節で述べるが、F区埋没谷についてはほぼ縄文時代の純粋な褐色土の包含層が形成されていたのに対し、J区埋没谷は縄文時代～中世までの遺物が泥炭層の中に混在するという状況であった。また、J区埋没谷の上部では一部焼土層が確認された部分もあったが、住居址等の遺構確認までには至らなかった。

遺物は遺構の残存状況が悪かった為、住居址内からの出土が比較的貧弱であった。これとは対照的に埋没谷からは多量の土器・石器が出土した。これら遺物は遺構外出土遺物として扱い、土器については、その胎土・施文具・文様等の特徴より第1群～第10群までの10種類に分類した。分類によると榛名平遺跡出土の縄文土器は前期初頭～後期まで分類でき、その主体は前期の土器群であった。把握された前期土器型式名は花積・塚田・中道・神ノ木・関山・有尾・諸磯A～Cであり、特に前期初頭からのいわゆる塚田式と中道式、前期中葉の神ノ木式から有尾式のそれぞれの土器群についてはその変遷過程が推測できそうな好資料と考えられた。石器群については多様な種別が出土しており、石製耳飾りや土製耳飾りも各1点出土している。石器群の考察については玉稿を頂き付編に掲載した。

以上、榛名平遺跡における縄文時代の遺構・遺物についての概要であるが、以下各遺構・遺物について竪穴住居址より述べる。



第7図 I区縄文時代遺構全体図

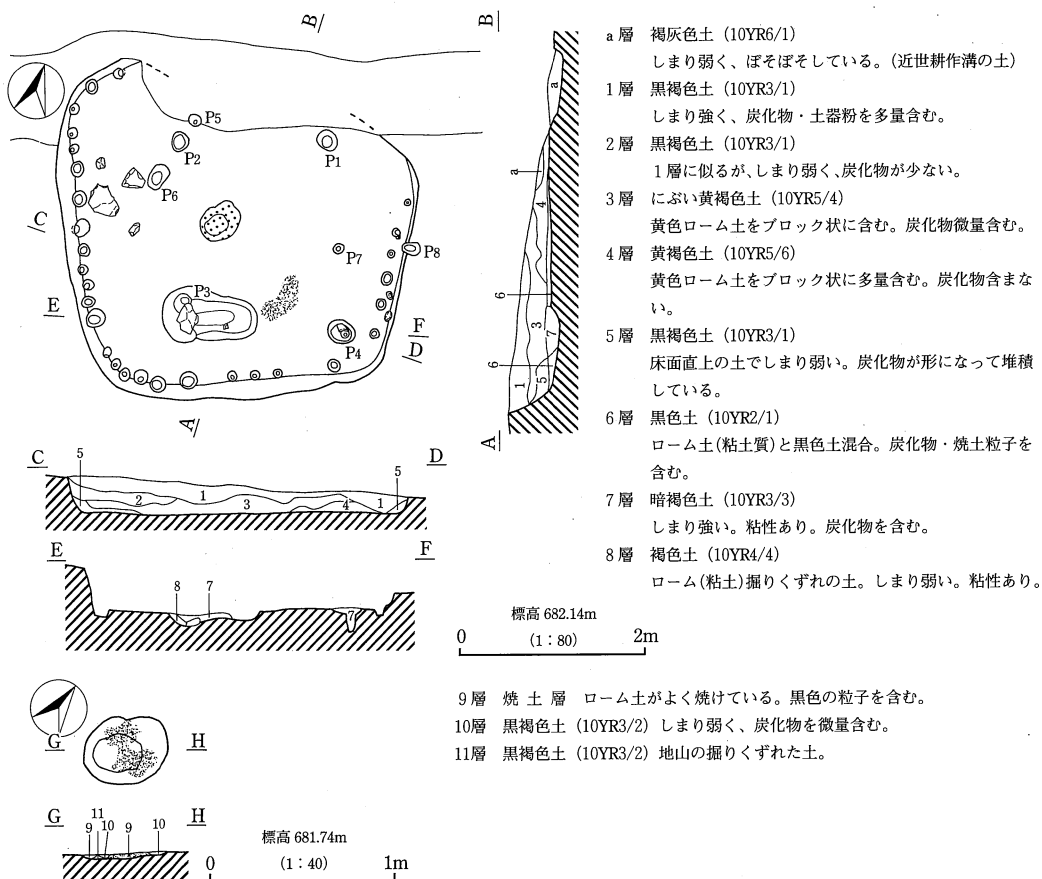
第IV章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

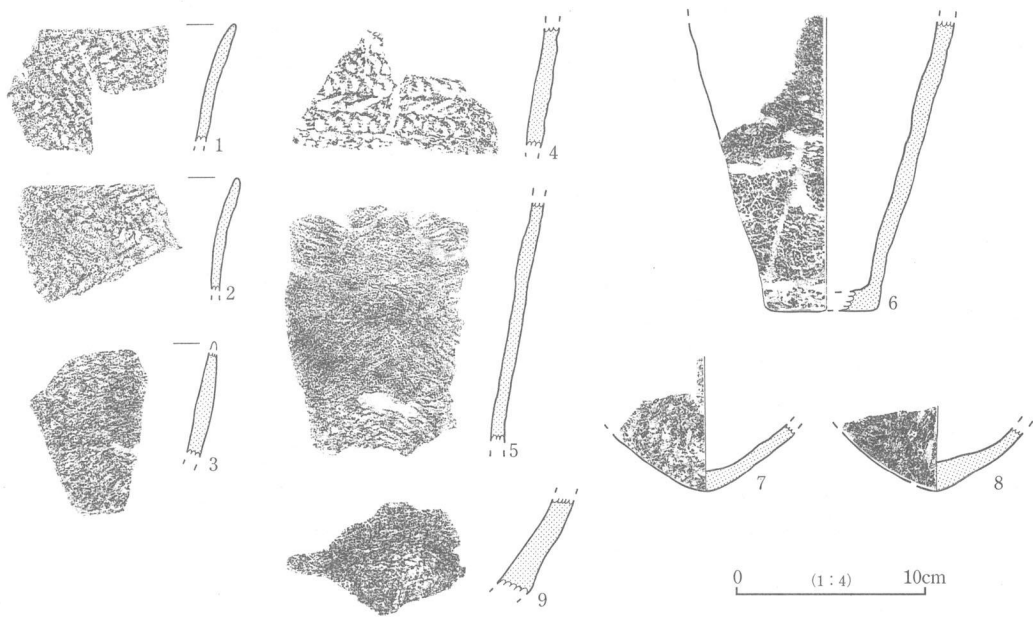
(1) IH1号住居址 (第8~10図、写真図版3)

本住居址は、調査区東よりの台地の先端部であるG-オー12、G-カー12Grに位置する。残存状態は北側が耕作溝によって削平されている。

形態は隅丸の方形を呈する。炉は住居址中央に造られていた。規模は北壁0.66m(残存)3.60m(推定)・南壁2.88m・西壁3.13m・東壁2.06m(残存)3.02m(推定)で、壁高さは南西コーナーで52cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-14°-Wを示す。住居址の床面積は推定で1.3㎡を測る。覆土は5層に分れる。床は住居址炉周辺部の西側にかけて硬質であり、貼り床は部分的(第6層)に確認された。壁溝は確認されなかった。柱穴は確認38個が検出された。この内住居



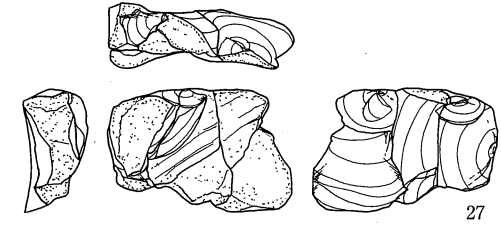
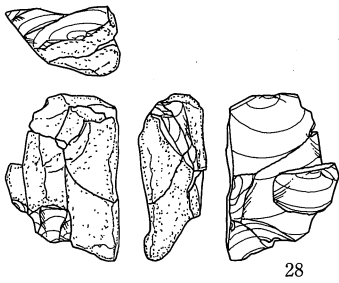
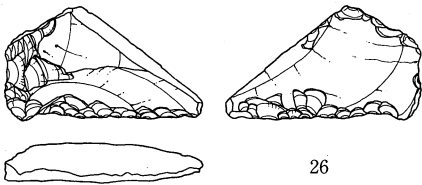
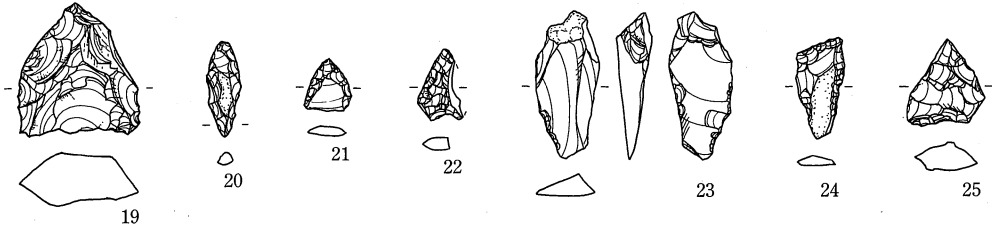
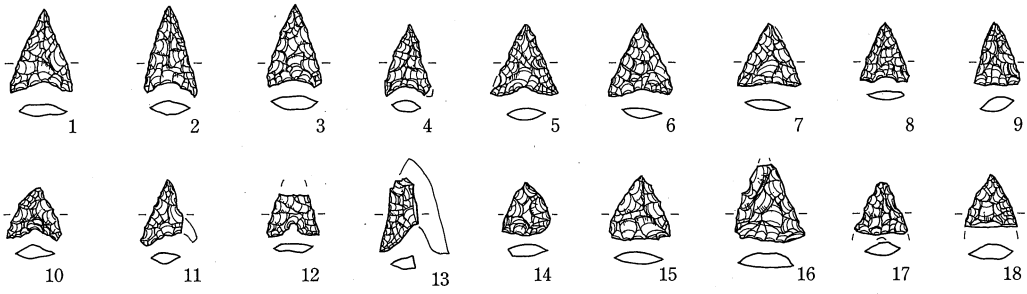
第8図 IH1号住居址実測図



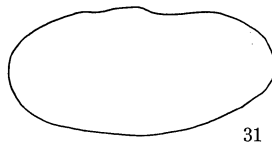
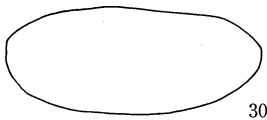
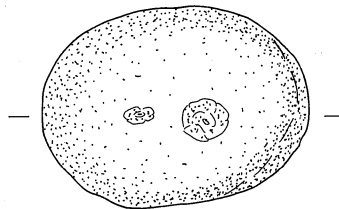
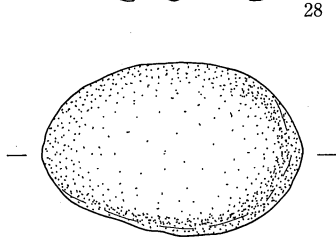
第9図 IH1号住居址出土遺物実測図①

挿図 番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色調 胎土	備考
1	深鉢 口縁部	— <6.4> —	外面 羽状縄文 内面 剥離著しく調整不明 ※繊維を含む 2と同一個体の可能性	5 YR 3/2 暗赤褐 断面中心部黒色 径1~2mmの白色砂粒を含む	
2	深鉢 口縁部	— <6.1> —	外面 羽状縄文 内面 剥離著しく調整不明 ※繊維を含む 1と同一個体の可能性	5 YR 3/2 暗赤褐 断面中心部黒色 径1~2mmの白色砂粒を含む	
3	深鉢 口縁部	— <8.6> —	外面 文様不明 内面 剥離著しく調整不明 ※繊維を含む 5と同一個体の可能性	5 YR 3/1 黒褐 断面中心部黒色 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	
4	深鉢 胴部	— <6.5> —	外面 多段ループ文 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 5/8 明赤褐 断面中心部黒色 径1~2mmの白色砂粒を微量含む	関山 I
5	深鉢 胴部	— <12.8> —	外面 撚紋 内面 ナデ ※繊維を含む 3と同一個体の可能性	5 YR 5/8 明赤褐 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	
6	深鉢 胴部	— <15.0> (6.0)	外面 文様不明 内面 ナデ? ※繊維を含む	5 YR 6/8 橙 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	関山 II
7	深鉢 せんだ	— <5.9> —	外面 文様不明 内面 調整不明 ※繊維を多量に含む	5 YR 5/8 明赤褐 内面黒色 径1~2mmの黒色粒子を含む	
8	深鉢 せんだ	— <7.1> —	外面 撚紋? 内面 ナデ ※繊維を含む	2.5YR 4/6 赤褐 内面黒色 径1~2mmの白色砂粒を含む	
9	深鉢 せんだ	— <6.1> —	外面 撚紋 内面 調整不明 ※繊維を多量に含む	5 YR 5/8 明赤褐 断面中心部黒色 径1~2mmの白色砂粒を含む	

第3表 IH1号住居址出土遺物観察表①



(1~29)
(1:2) 5cm



(1:3) (30~31) 10cm

第10图 IH1号住居址出土遺物実測図②

挿図 番号	器種	法 量(mm・g)				形態	素材	剥離 方向	剥離面	石 材	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鏃	23.0	17.0	3.0	0.7	凹基		両面	平坦	黒曜石	
2	石 鏃	24.0	14.5	4.0	0.8	凹基		両面	平坦	チャート	カエシ部非対称、右側が突出する。
3	石 鏃	23.0	15.0	4.5	0.8	凹基		両面	平坦	チャート	
4	石 鏃	19.5	13.0	3.5	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石(漆黒)	
5	石 鏃	19.0	19.0	4.5	0.7	凹基		両面	平坦	黒曜石	
6	石 鏃	19.5	18.0	3.5	0.6	凹基		両面	平坦	黒曜石	
7	石 鏃	17.0	17.0	3.5	0.5	凹基		両面	平坦	黒曜石	基部わずかに内湾。
8	石 鏃	16.0	13.5	3.0	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石	
9	石 鏃	17.0	12.5	4.0	0.5	平基		両面	平坦	黒曜石	
10	石 鏃	14.5	14.5	4.5	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部欠損。
11	石 鏃	18.0	11.0	3.5	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石	右側カエシ部欠損。
12	石 鏃	11.0	14.0	3.0	0.4	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部欠損。基部挟りが深い。
13	石 鏃	20.0	10.5	4.0	0.5	凹基		両面	平坦	黒曜石	右側欠損。基部挟りが深い。
14	石 鏃	14.5	13.5	3.5	0.5	平基		両面	平坦	黒曜石	
15	石 鏃	17.0	16.5	4.0	0.7	平基		両面	平坦	黒曜石	
16	石 鏃?	21.0	19.0	5.0	1.5	平基		両面	平坦	黒曜石(漆黒)	石鏃未完成? ミニチュア石匙か?
17	石 鏃	14.0	14.5	3.5	0.5	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部、カエシ部欠損。
18	石 鏃	14.0	14.0	4.5	0.6			両面	急角度	黒曜石	先端部側縁は急角度で剥離。基部欠損。
19	石 鏃	36.0	32.0	15.0	13.9	平基		両面	急角度	チャート	未成品。基部平坦部はHIで加工。
20	石 錐	26.0	10.0	8.0	1.5	棒状			急角度	黒曜石(夾雑)	先端部摩耗。
21	石 鏃	14.0	13.0	3.5	0.4	平基		両面	急角度	黒曜石	表裏に素材面を残す。
22	石 鏃	19.0	13.0	4.5	0.6	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部から右側にかけて、左側カエシ部欠損。
23	石 匙	39.0	17.5	10.0	4.1		横 長			黒曜石	
24	石 鏃	27.0	13.0	3.5	0.8		横 長	正+反	平坦	黒曜石	基部わずかに挟り。表面に原礫面を残す。
25	小形両面 加工石器	23.5	21.0	8.5	2.5	凹基		両面	平坦	黒曜石	先端部、右側カエシ部欠損。
26	削 器	30.0	53.0	11.0	15.3		横 長	両面	急角度	安山岩	正方向に急角度剥離を施す。
27	剥片(接合)	33.0	49.0	18.0	18.2					黒曜石	原礫面を残し、石核調整剥片と思われる。
28	剥片(接合)	45.0	30.0	18.0	17.8					黒曜石	原礫面を残し、石核調整剥片と思われる。
29	剥片(接合)	23.0	22.0	9.5	1.1					黒曜石	石核調整剥片と思われる。
30	敲 石	69.0	104.3	43.5	370.0		長楕円礫			安山岩	端部に敲打痕。
31	敲 石	80.3	107.3	57.0	522.6		長楕円礫			安山岩	表裏面に2対の敲打痕。

第4表 IH1号住居址出土遺物観察表②

址中央部の支柱的なピットはP1～8であり、P10～38は壁柱穴として検出された。規模はP1が径22cm・深さ28cm、P2が径20cm・深さ20cm、P3が径20cm・深さ25cm、P4が径30cm・深さ22cm、P5が径13cm・深さ8cm、P6が径28cm・深さ24cm、P7が径11cm・深さ17cm、P8が径20cm・深さ17cmを測る。壁柱穴に関しては径15～10cm・深さ12～8cm前後であった。また、本址は住居址南側に住居址内土坑的な掘り込みが確認された。規模は長軸1.01m・短軸48cm・深さ17cmであった。土坑内からは西脇より人頭大の礫が検出された。炉は住居址ほぼ中央部に検出され、形態は円形であった。規模は長軸45cm・短軸35cmの掘り込みをもっていた。上面で確認された焼土は軟質であり厚さ3cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土内を中心に出土した。図示した土器の出土位置は1～3と5が炉西側で床より20cm浮いた状態、4が東壁よりで床直、6がP6脇で床直、7～8は覆土中である。

石器類についてはいずれも覆土中からの出土である。

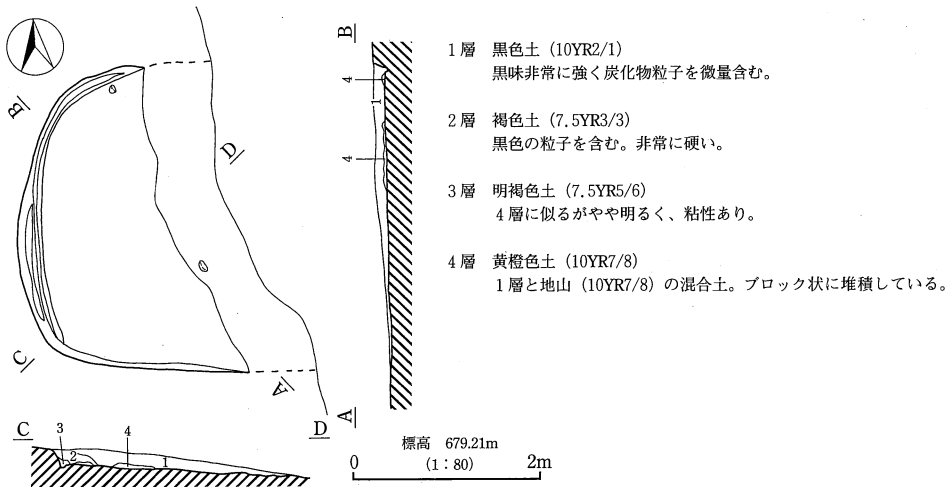
これらの遺物より本址は縄文前期中葉（関山Ⅱ平行）に位置づけられると考える。

(2) IH2号住居址（第11・12図、写真図版四①）

本住居址は、調査区東よりの台地先端であるG-サー9・10、G-シー10Grに位置する。残存状態は東側が地形の傾斜により削平されている。

形態はほぼ隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.76m（残存）・南壁1.88m（残存）・西壁2.85mで、壁高さは南西コーナーで17cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は検出部で4.0㎡を測る。覆土は4層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は西壁に確認された。溝幅は11~14cm、深さは4.5cmを測る。柱穴は確認されなかった。

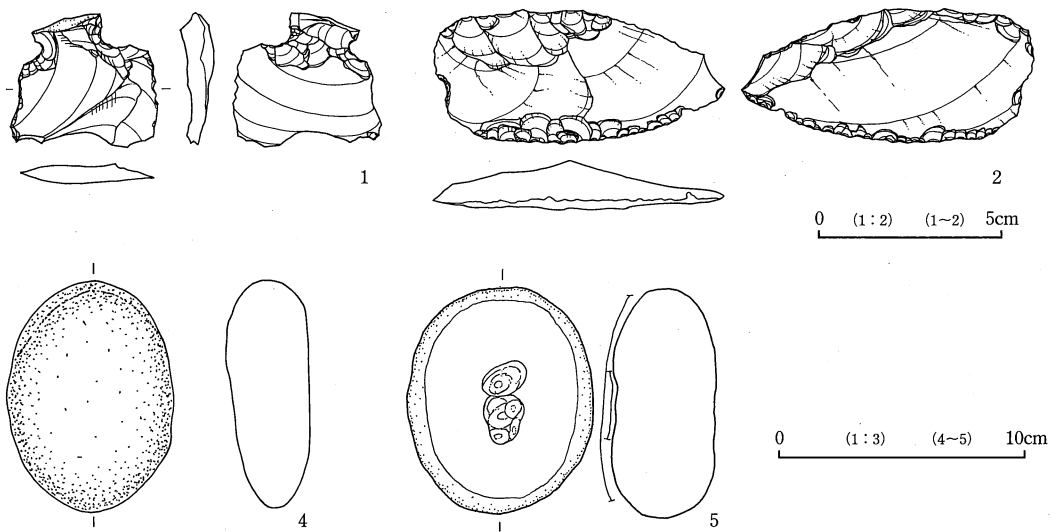
本址からの出土遺物は図示した石器4点と覆土中より少量の繊維混入の縄文土器片が出土した。図示した石器の内1と2は西壁際の床直より、4と5は覆土中より出土した。本址の帰属時期は出土土器が少なく不確実ではあるが縄文前期前半～中葉の範囲と考えられる。



第11図 IH2号住居址実測図

挿図番号	器種	法量 (mm・g)				形態	素材	技術	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量							
1	石匙	36.0	40.5	9.5	7.3	横長	HHP・HI			黒曜石	握み部はHIとHHPで加工。礫打面を残す。	
2	削器	37.0	79.5	14.0	24.5	横長	WSMP	正+反	平坦	頁岩	刃部は正方向の剥離で打面を作り、反方向に剥離している。素材打面をHDで取り除く。	
4	磨石	94.5	67.5	35.5	241.2	長楕円礫				安山岩	風化激しく、スリ面不明瞭。	
5	磨石+敲石	93.0	76.5	44.5	372.3	長楕円礫				安山岩	主面部スリ面明瞭。2対の敲打痕明瞭。	

第5表 IH2号住居址出土遺物観察表



第12図 IH2号住居址出土遺物実測図

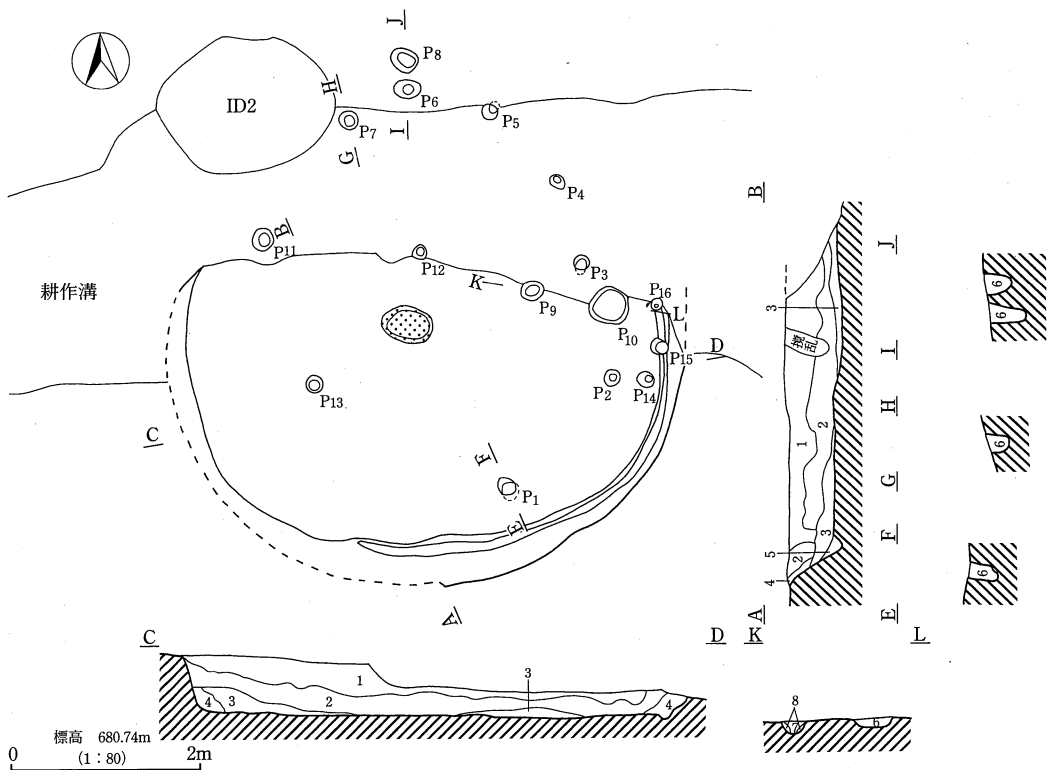
(3) IH4号住居址 (第13~15図、写真図版四②)

本住居址は、調査区東側よりの台地の先端部であるG-キー7・8、G-クー7・8Grに位置する。残存状態は北側が耕作溝によって削平されている。また重複遺構は新しい方よりIH10号→本址→IH12号→IH14号住居址である。

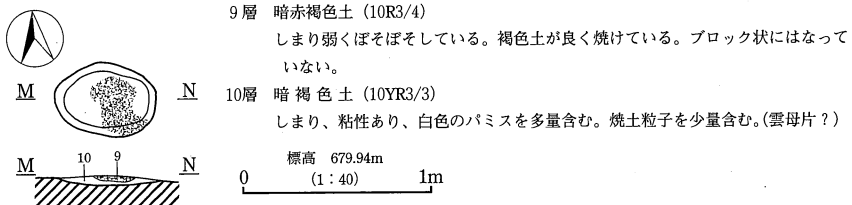
形態はほぼ円形を呈する。炉は住居址中央部にあった。規模は長軸5.88m(推定)・短軸5.5m(推定)で、壁高さは南側中央で49cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位はほぼNを示す。住居址の床面積は検出部分で12.5㎡を測る。覆土は4層に分かれた。床は全体に軟質であった。壁溝は東側半分で確認された。規模は幅16~54cm・深さ8cmを測り、断面形はU字形を呈する。ピットは16カ所確認され、規模はP1が径20cm・深さ33cm、P2が径18cm・深さ14cm、P3が径17cm・深さ25cm、P4が径17cm・深さ18cm、P5が径18cm・深さ25cm、P6が径29cm・深さ42cm、P7が径20cm・深さ27cm、P8が径30cm・深さ35cm、P9が径26cm・深さ11cm、P10が径42cm・深さ10cm、P11が径24cm・深さ10cm、P12が径15cm・深さ15cm、P13が径17cm・深さ15cm、P14が径19cm・深さ9cm、P15が径20cm・深さ15cm、P16が径12cm・深さ20cmを測る。

炉は住居址中央部より検出された。形態は楕円形であり、規模は長軸54cm・短軸38cmの掘り込みを持つ。焼土は3cmの厚さで検出されたが硬質化しておらずぼそぼそしていた。

本址からの出土遺物は図示した土器・石器の他に覆土中から多くの土器が小片ではあるが出土した。また礫については床よりも浮いた状態であるが人頭大の大きさの物が多数出土した。図示した土器の出土位置は9が住居址中央東よりの床面より出土した他は覆土中の出土である。



- 1層 黒色土 (10YR2/1) しまりあり、土器粉を多量、白色パミスを微量含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり、粘性ややあり、きめ細かく、白色パミスをやや多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1) しまりややあり、白色のパミスを多量、φ1~2mmのオレンジパミスをやや多く含む。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり、粘性あり、白色の粒子を含む。黄色の地山を掘りくずしたような土。
- 5層 褐灰色土 (10YR4/1) しまりあり、3層に似るが、白色の粒子が細かい。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子少量含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子少量含む。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子多量含む。

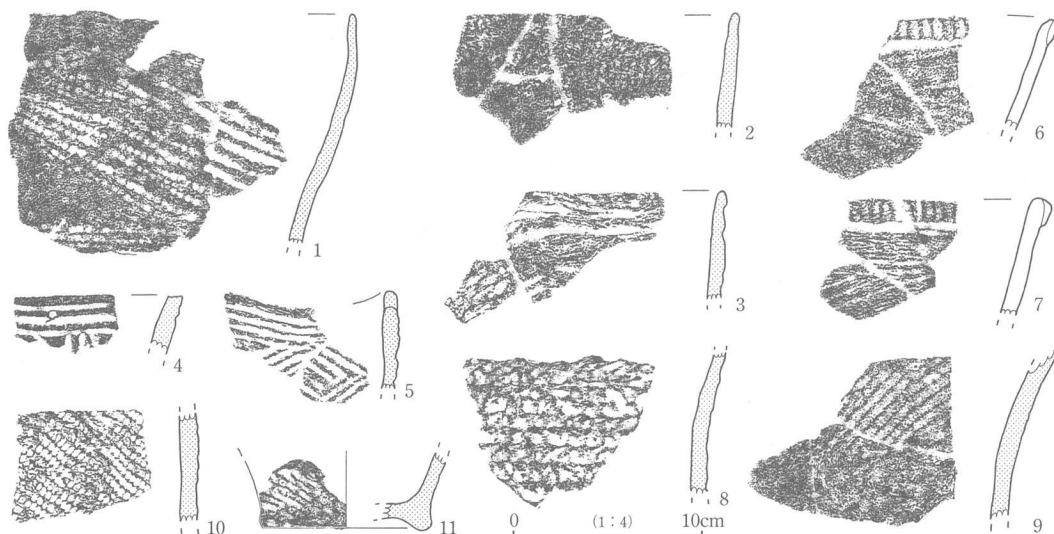


- 9層 暗赤褐色土 (10R3/4) しまり弱くぼそぼそしている。褐色土が良く焼けている。ブロック状にはなっていない。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり、粘性あり、白色のパミスを多量含む。焼土粒子を少量含む。(雲母片?)

第13図 IH4号住居址実測図

なお、6と7は同一個体の可能性があるが6の器面が荒れており確証を得ない。石器については37の磨石が住居址中央西よりの床面より出土している他は覆土中の出土である。

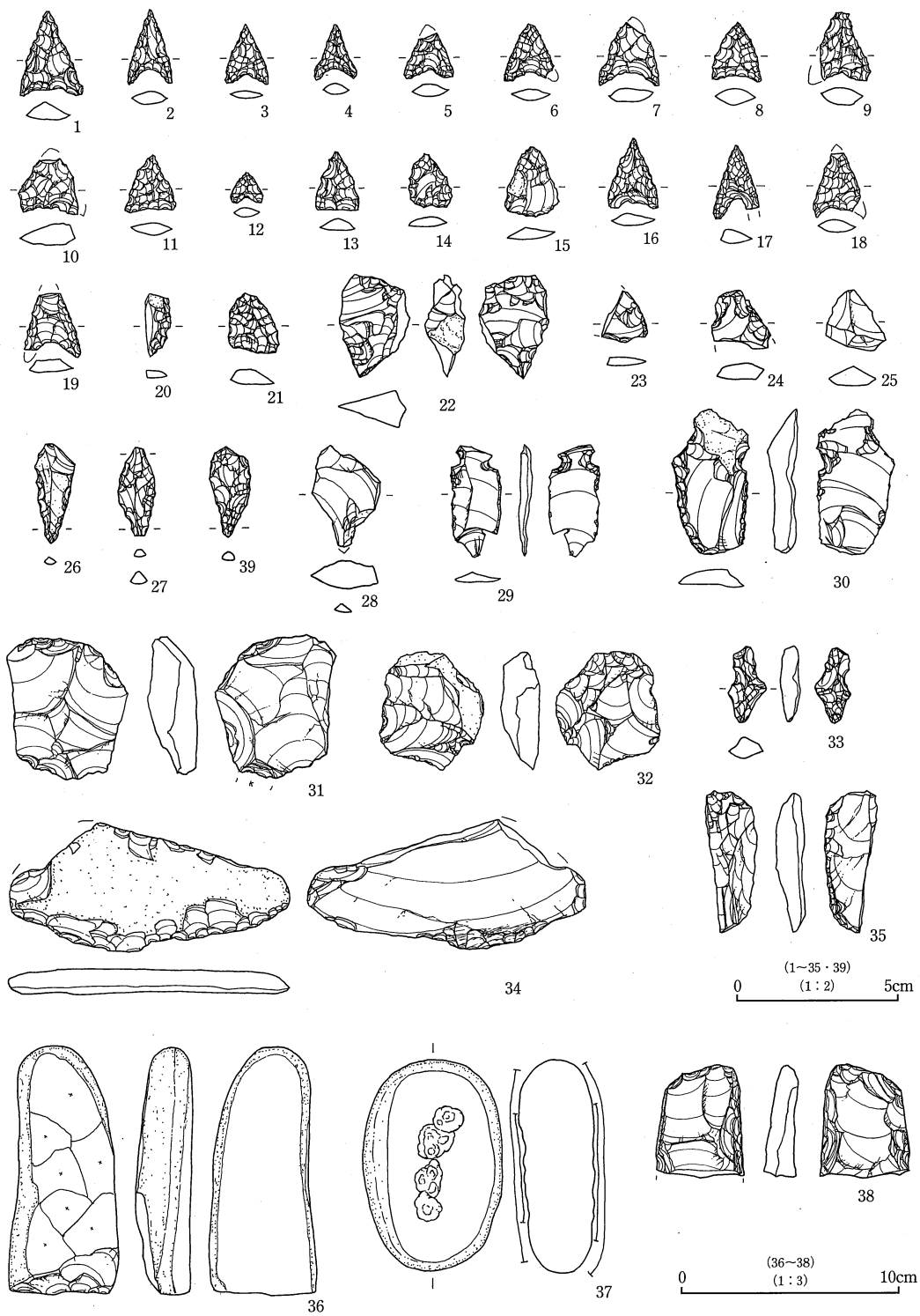
これらの遺物より本址は縄文前期中葉(神ノ木・関山Ⅱ平行)に位置づけられると考える。



第14図 IH4号住居址出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色調 胎土	備考
1	深鉢 口縁部	— <12.6> —	外面 櫛歯状工具による列点状刺突文 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 5/8 明赤褐 径1~2mmの白色砂粒と赤色粒子を含む	有尾
2	深鉢 口縁部	— <6.1> —	外面 束の縄文? 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 3/1 黒褐 断面黒色 径1~2mmの赤色粒子を少量含む	神ノ木?
3	深鉢 口縁部	— <5.8> —	外面 竹管による沈線? 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 3/1 黒褐 断面黒色 径1~2mmの白色粒子を少量含む	
4	深鉢 口縁部	— <3.1> —	外面 半截竹管状工具による沈線と円形の刺突文 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 5/6 明赤褐 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	関山Ⅱ
5	深鉢 口縁部	— <4.5> —	外面 半截竹管状工具による沈線により菱形文を描く 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 6/6 橙 断面黒色 径1~2mmの赤色粒子を多く含む	関山Ⅱ
6	深鉢 口縁部	— <6.3> —	外面 口縁部折り返し 文様は櫛歯状工具による刺突文がありそうだが、摩耗のため不明 内面 ナデ	5 YR 7/6 橙 径1~2mm赤色粒子と白色粒子を多く含む	神ノ木
7	深鉢 口縁部	— <6.2> —	外面 口縁部折り返し 口唇部に櫛歯状工具による連続刺突文 胴部に列点状刺突文と条線を施す 内面 ナデ	5 YR 6/6 橙 径2~3mmの白色砂粒を多く含む	神ノ木
8	深鉢 胴部	— <7.4> —	外面 多段ループ文 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 5/8 橙 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を少量含む	関山Ⅱ
9	深鉢 胴部	— <8.9> —	外面 縄文(無節?) 内面 ナデ ※繊維を微量に含む	2.5YR 4/8 赤褐 径1~2mmの赤色粒子を多く含む	
10	深鉢 胴部	— <5.7> —	外面 縄文(単節RL) 内面 ナデ ※繊維を微量に含む	10YR 6/4 にぶい黄橙 断面黒色 径2~3mmの長石を少量含む	
11	深鉢 底部	— <3.6> (8.8)	外面 縄文(無節?) 内面 ナデ ※繊維を含む	7.5YR 6/6 橙 断面黒色 径1~2mmの赤色粒子を多く含む	

第6表 IH4号住居址出土遺物観察表①



第15图 IH4号住居址出土遗物实测图②

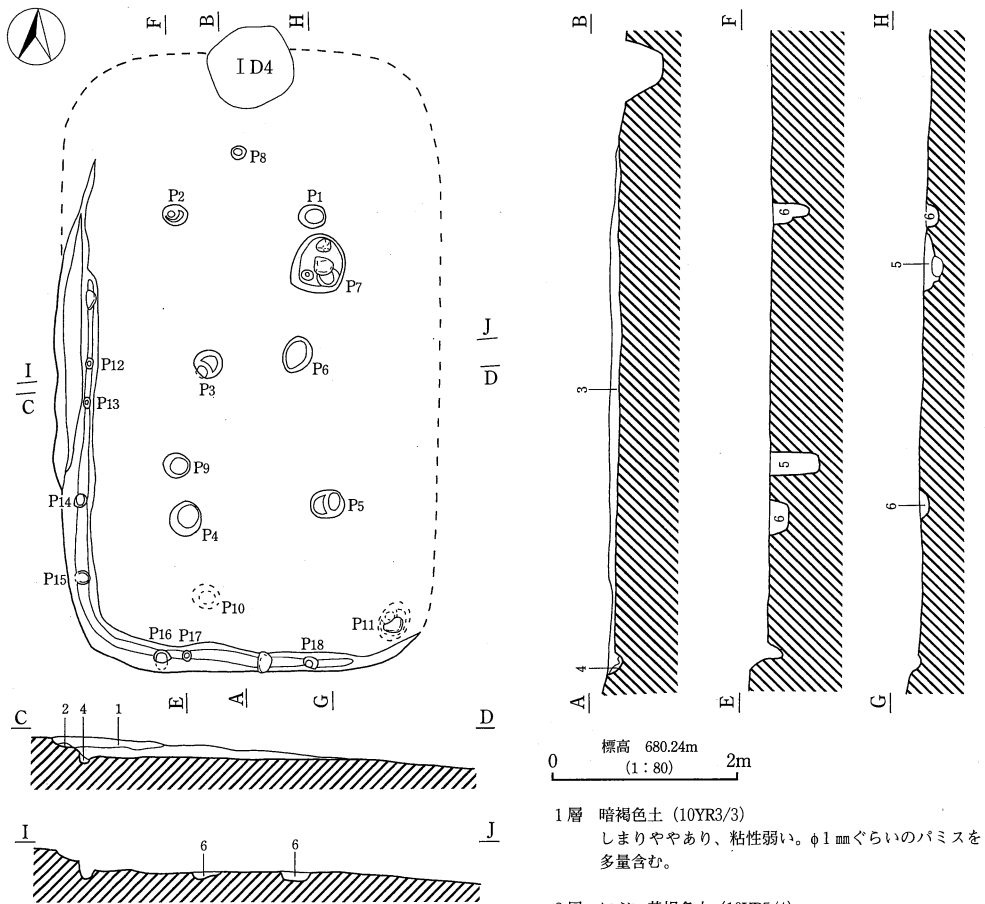
挿図 番号	器種	法 量(mm・g)				形態	素材	剥 離 方 向	剥離面	石 材	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鏃	26.5	19.0	6.0	1.6	凹基		両 面	平 坦	チャート	裏面平坦で、表面に稜を持つ。
2	石 鏃	23.5	14.0	4.0	0.6	凹基		両 面	平 坦	チャート	裏面平坦にする。基部抉り深い。
3	石 鏃	19.0	13.5	3.0	0.4	凹基		両 面	平 坦	黒曜石	左側カエシ部わずかに欠損。
4	石 鏃	17.5	13.5	3.5	0.4	凹基		両 面	急角度	黒曜石	裏面平坦にする。表面側に急角度で剥離し、稜を付ける。
5	石 鏃	14.5	15.5	4.5	0.6	凹基		両 面	急角度	黒曜石	先端部欠損。裏面を平坦にし、表に稜を作出。
6	石 鏃	18.0	16.0	4.0	0.5	凹基		両 面	平 坦	黒曜石	右側カエシ部欠損。
7	石 鏃	20.0	19.0	4.5	1.1	凹基		両 面	平 坦	チャート	先端部欠損。
8	石 鏃	19.0	15.5	5.0	1.2	凹基		両 面	急角度	玉 髓	側縁から急角度剥離で整形。
9	石 鏃	21.0	16.0	5.5	1.3	凹基		両 面	急角度	黒曜石	先端部、左側欠損。鋸歯側に整形される。
10	石 鏃	17.0	18.5	7.5	1.8	凹基		両 面	急角度	黒曜石	先端部欠損。右側未加工。未成品。
11	石 鏃	18.0	16.0	4.5	0.7	平基		両 面	平 坦	黒曜石	裏面平坦に整形。
12	石 鏃	10.0	10.0	4.0	0.2	凹基		両 面	急角度	黒曜石	小形。
13	石 鏃	18.5	14.0	4.5	0.7	平基		両 面	急角度	チャート	裏面平坦。裏面は素材面を残し、二次加工品が少ない。
14	石 鏃?	17.0	13.5	3.0	0.6	平基		両 面	急角度	黒曜石	石鏃未成品? ミニチュア石匙か?
15	石 鏃?	22.0	17.0	4.0	1.0	平基		正+反	平 坦	チャート	石鏃未成品? ミニチュア石匙か?
16	石 鏃	22.0	16.0	4.5	0.8	凹基		両 面	平 坦	黒曜石	先端部は急角度で表面側に剥離を入れて断面三角にする。
17	石 鏃	23.5	14.0	4.5	0.7	凹基		両 面	急角度	黒曜石	裏面平坦で表面に急角度剥離を入れる。
18	石 鏃	20.0	15.0	4.5	0.9	凹基		両 面	急角度	黒曜石	先端部は、急角度剥離で断面菱形に整形。
19	石 鏃	20.0	17.5	5.0	1.0	凹基		両 面	急角度	頁 岩	先端部、左側カエシ部欠損。先端を急角度剥離で断面菱形に整形。
20	石 鏃?	19.5	8.5	4.0	0.5			正	平 坦	黒曜石	左側折れ。未成品?
21	小形両面加工	18.5	16.0	5.0	1.3			両 面	急角度	黒曜石	石鏃未成品? あるいはミニチュア?
22	二次加工剥片	32.0	22.0	12.0	5.1		縦 長	両 面	平 坦	黒曜石	縁片に加工を施す。
23	二次加工剥片	16.0	14.0	3.5	0.6			両 面	平 坦	黒曜石	左側欠損。
24	二次加工剥片	18.0	18.5	7.0	1.8			反	平 坦	黒曜石(夾雑)	下端部折れ。
25	二次加工剥片	19.0	19.0	7.5	1.8			反	平 坦	チャート	石鏃未成品?
26	石 錐	31.0	12.0	5.0	1.9	棒状	縦 長	正+反	急角度	チャート	先端部を急角度剥離で刃部を整形。
27	石 錐	27.0	12.0	8.0	2.3	棒状	縦 長	正+反	急角度	チャート	先端部欠損。
28	剥 片	31.5	21.0	1.5	5.8		縦 長			チャート	原礫面を持ち、HDで剥離。
29	石 匙	34.0	16.0	4.0	1.4	縦	縦 長	正+反	平 坦	黒曜石	摘み部のみでの加工で、左側にMF顕著。
30	石 匙	45.0	24.5	9.0	7.6	縦	縦 長	正	急角度	黒曜石	左側を急角度剥離で入念に整形されるが、右側は使用痕の可能性。
31	ヘラ状石器	66.0	55.5	23.2	73.8		両 極	正	急角度	安山岩	左側欠損。素材は両極剥片。
32	小形両面加工石器	37.0	32.0	12.0	12.5					黒曜石	
33	異形石器	24.0	12.0	6.5	1.3	棒状		両 面	急角度	黒曜石	先端部摩耗。両側に角が付く。
34	石 匙	59.2	129.0	10.5	95.3		横 長	両 面	平 坦	結晶片岩	左側わずかに欠損。
35	削 器	44.0	16.0	9.5	5.5		縦 長		平 坦	チャート	MFが見られる。
36	敲 石	115.5	50.3	26.2	173.3		長楕円礫			安山岩	被熱による火はねが見られ、側面到手づれによると思われる摩耗が見られる。
37	磨石+敲石	97.5	64.5	34.0	283.2		長楕円礫			安山岩	表裏にスリ面が顕著で、タタキ痕が明瞭に見られる。
38	ヘラ状石器	52.5	41.3	15.0	38.5	短冊?				ホルンフェルス	右側の刃潰れ部分に摩耗が見られる。着柄痕と思われる。打製石斧の頂部?
39	石 錐	28.0	12.0	7.0	2.1	棒状			急角度	頁 岩	断面三角形。摘み部の稜線上に摩耗。

第7表 IH4号住居址出土遺物観察表②

(4) IH6号住居址 (第16~18図、写真図版5)

本住居址は、調査区東側台地の先端部であるG-オー4・5、G-カー4・5Grに位置する。残存状態は北側半分が畑の耕作と地形によって削平されている。

形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。炉は確認されなかった。住居址規模は南壁3.42m・西壁5.12m(残存)6.0m(推定)・東壁0.2m(残存)6.0m(推定)で、壁高さは南西コーナーで38cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位はN-7°-Wを示す。住居址の床面積は推定で22.3㎡を測る。覆土は3層に分れる。床は全体に堅く踏み締まった感じである。壁溝は南壁と検出された西壁で確認された。規模は幅15~33cm・深さ8cmで、断面形はU字形を呈する。ピットは17カ所検出さ



1層 暗褐色土 (10YR3/3)
しまりややあり、粘性弱い。φ1mmぐらいのパミスを多量含む。

2層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
粘性あり。パミス含む。

3層 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱く、粘性強い。φ1mmぐらいのパミスを少量含む。

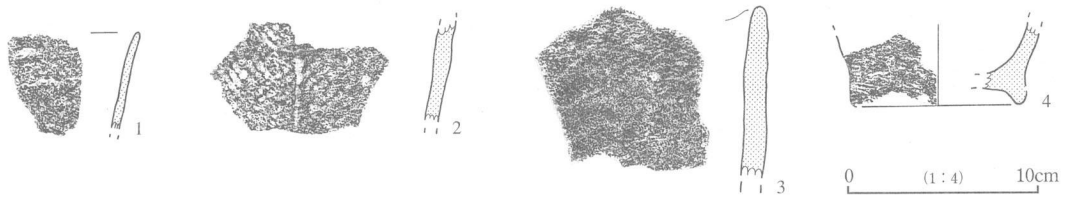
4層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ローム土がブロック状に混入。φ2mm大の黄色パミスを含む。

5層 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり、φ2~3mmのパミスを多量含む。

6層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりややあり、褐色土ブロック・ローム粒子・パミス(オレンジ)を含む。

第16図 IH6号住居址実測図

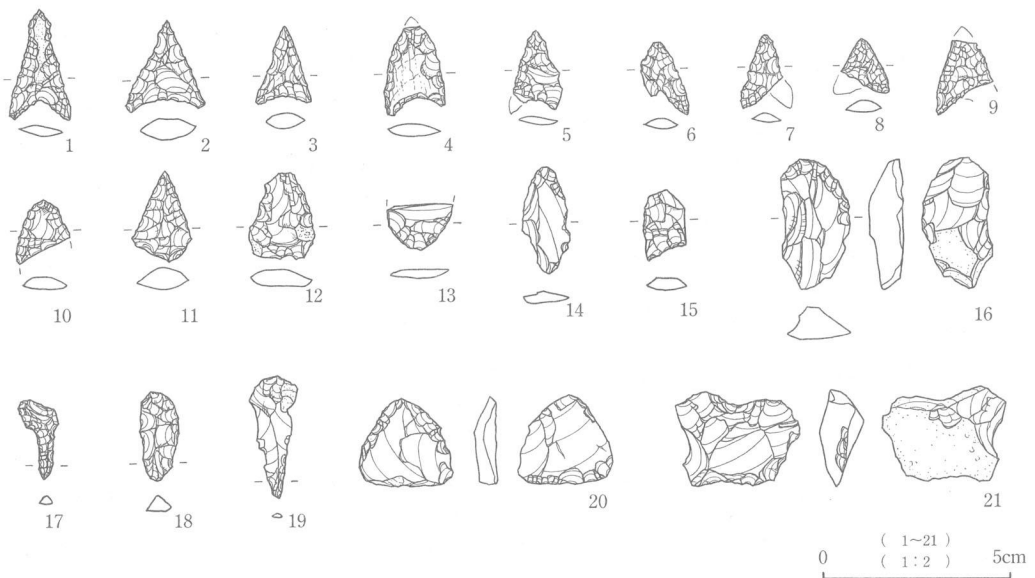
れ、規模はP1が径29cm・深さ14cm、P2が径26cm・深さ37cm、P3が径30cm・深さ30cm、P4が径37cm・深さ31cm、P5が径34cm・深さ10cm、P6が径39cm・深さ9cm、P8が径14cm・深さ14cm、P9が径27cm・深さ52cm、P10が径30cm・深さ40cm、P11が径41cm・深さ35cm、P12が径12cm・深さ14cm、P13が径11cm・深さ6cm、P14が径13cm・深さ10cm、P15が径16cm・深さ14cm、P16が径16cm・深さ16cm、P17が径11cm・深さ7cm、P18が



第17図 IH6号住居址出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整面 外面・内面	色調 胎土	備考
1	深鉢口縁部	— <5.2> —	外面 摩耗により不明 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR3 / 6 暗赤褐 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を含む	
2	深胴鉢部	— <5.5> —	外面 羽状縄文? 内面 ナデ ※繊維を含む	7.5YR7 / 8 黄橙 断面黒色 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	
3	深鉢口縁部	— <8.7> —	外面 波状の口縁 東の縄文? 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR4 / 2 灰褐 断面黒色 径1~2mmの砂粒を含む	
4	深底鉢部	— <3.1> (9.0)	外面 文様不明 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR6 / 6 橙 径1~2mmの長石を少量含む	

第8表 IH6号住居址出土遺物観察表①



第18図 IH6号住居址出土遺物実測図②

挿図 番号	器種	法 量(mm・g)				形態	素材	剥離 方向	剥離 面	石 材	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鏃	30.0	16.0	3.5	0.8	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	先端部をスベード形に作り出す。表裏に素材面を残す。
2	石 鏃	24.5	21.0	6.0	1.7	凹基		両面	急角度	チャート	断面菱形になり厚みがある。
3	石 鏃	21.0	15.0	4.0	0.8	凹基		両面	急角度	安 山 岩	風化激しい。
4	石 鏃	24.0	16.5	4.0	1.3	凹基		両面	平坦	チャート	先端部欠損。原礫面を残し、右側裏面は加工なし。
5	石 鏃	21.0	13.5	3.0	0.6	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	左側端部欠損。
6	石 鏃	20.0	13.0	3.0	0.4	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	左側カエシ部欠損。
7	石 鏃	20.0	12.0	2.5	0.3	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	右側カエシ部欠損。
8	石 鏃	15.0	13.0	3.5	0.4	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	左側カエシ部欠損。
9	石 鏃	20.0	15.5	3.0	0.6	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	先端部、右側カエシ部欠損。
10	石 鏃	17.5	14.5	4.0	0.6			両面	平坦	黒 曜 石	欠損。裏面は素材面を残す。石鏃の破損品の可能性あり。
11	石 鏃	24.0	16.0	7.0	1.7	凹基?		両面	平坦	黒 曜 石	端部は厚みがあり、急角度剥離されている。
12	石 鏃?	24.0	18.0	6.0	2.0	平基		両面	急角度	黒 曜 石	先端部欠損。裏面に素材面を残し、末端、周縁部を急角度剥離で整形。
13	石 鏃?	12.5	18.0	3.0	0.6			両面	平坦	黒 曜 石	上端部は欠損。
14	石 鏃?	28.5	13.0	4.0	1.0			正+反	急角度	頁 岩	両側欠損?
15	石 鏃	19.0	11.5	4.5	0.7	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	先端右側カエシ部欠損。右側は未加工。裏面に素材面残す。
16	石 匙?	35.0	19.0	9.5	5.1			正+反	平坦	黒 曜 石	裏面に原礫面を残す。
17	石 錐	21.0	11.0	3.5	0.5	Y字		両面	急角度	黒 曜 石	先端部、右側基部欠損。
18	石 錐	24.0	11.0	7.0	1.5	棒状		両面	急角度	黒 曜 石	左側は、80°におよぶ急角度剥離で加工され、右側は、70度前後の細かい急角度剥離で整形。
19	石 錐	33.0	13.0	5.0	1.1	棒状	縦 長	両面	平坦	黒 曜 石	断面三角形の石刃素材を用い、末端部を刃部に整形。両側に挟りを入れる。
20	削 器	23.5	25.0	6.0	3.6	三角	横 長	正+反	急角度	チャート	三角形で各辺に加工が入る。
21	石 匙	25.5	33.0	12.0	8.1	横	横 長	反	急角度	黒 曜 石	裏面に原礫面を残す。刃部と思われる下端部には使用による刃こぼれと思われるものがある。

第9表 IH6号住居址出土遺物観察表②

径17cm・深さ13cmを測る。これらピットの内、検出位置よりP1～P6までが支柱穴と考えられる。またP12～P18までは壁柱穴である。またP7とした部分は住居址内土坑と考えられ、規模は長軸63cm・短軸54cm・深さ11cmを測る。土坑内より礫が2点検出された。

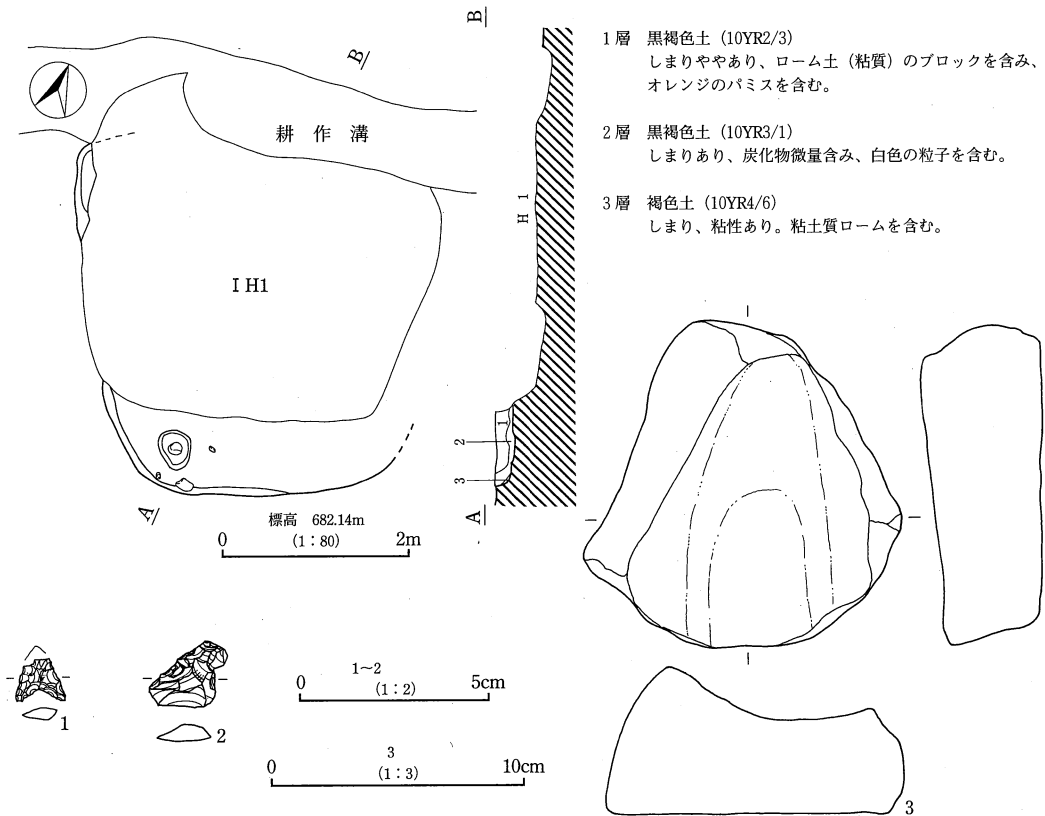
本址からの出土遺物は覆土中を中心に出土した。図示した土器の内3が住居址南西コーナーよりから床面より浮いた状態で出土した。その他の図示した土器と石器類は覆土中の出土である。

これらの出土遺物より本址は縄文前期中葉に位置づけられると考える。

(5) IH9号住居址 (第19図、写真図版六①)

本住居址は、調査区東側台地の北東部先端であるG-オー-12、G-カー-12・13Grに位置する。残存状態は北側がIH1号住居址により削平され、住居址の1/4のみの検出に止まった。

形態はほぼ隅丸長方形を呈すると考えられる。炉は不明である。規模は北壁0.14m(残存)3.8m(推定)・南壁1.45m(残存)2.40m(推定)・西壁3.58m・東壁0.3m(残存)3.60m(推定)で、壁高さは西壁で23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。長軸方位は不明である。住居址の床面積は残存部で3.7㎡、推定で13.3㎡を測る。覆土は3層に分れ、床はやや硬質であるが地山を踏み固めたよう



第19図 IH9号住居址及び出土遺物実測図

挿図 番号	器種	法 量 (mm・g)				形態	素材	技術	剥離 方向	剥離面	石材	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量							
1	石 鏃	11.0	13.5	3.5	0.4	凹基		NSMP?	両面	平坦	黒 曜 石	先端部欠損。表面側にやや急角度剥離で整形。
2	石 匙?	12.5	21.5	4.5	1.3	横 縦 長		NSMP?	正	平坦	チャート	ミニチュア? 摘み部は、素材の形を生かし、抉りは特に作出していない。
3	石 皿	123.0	128.3	61.0	687.7	凹基					多孔質安山岩	破損激しく石皿底面部の破片である。

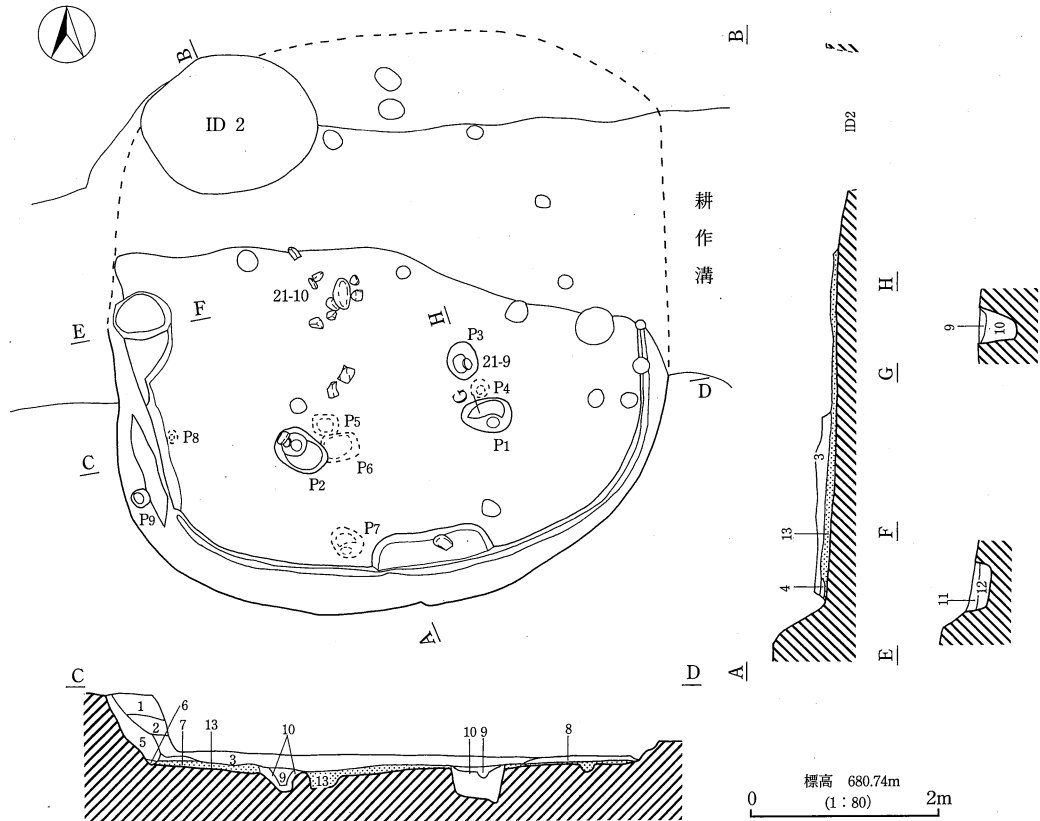
第10表 IH9号住居址出土遺物観察表

な状態であった。壁溝は検出されなかった。住居址南西コーナーに土坑的ピットが一カ所検出された。規模は長軸42cm・短軸34cm・深さ4cmを測る。土坑内からは図示したNo.3の石皿が出土した。

本址からの出土遺物は図示した石器類3点の他は繊維混入の縄文土器片3点が出土したのみである。よって本址の帰属時期は出土土器が少なく不確実ではあるが縄文前期前半～中葉の範囲と考えられる。

(6) IH12号住居址 (第20・21図、写真図版六②)

本住居址は、調査区東側の台地先端部であるG-キー7・8.G-クー7・8Grに位置する。残存状態は北側が近世の耕作溝により、また上部がIH4号住居址により削平されている。



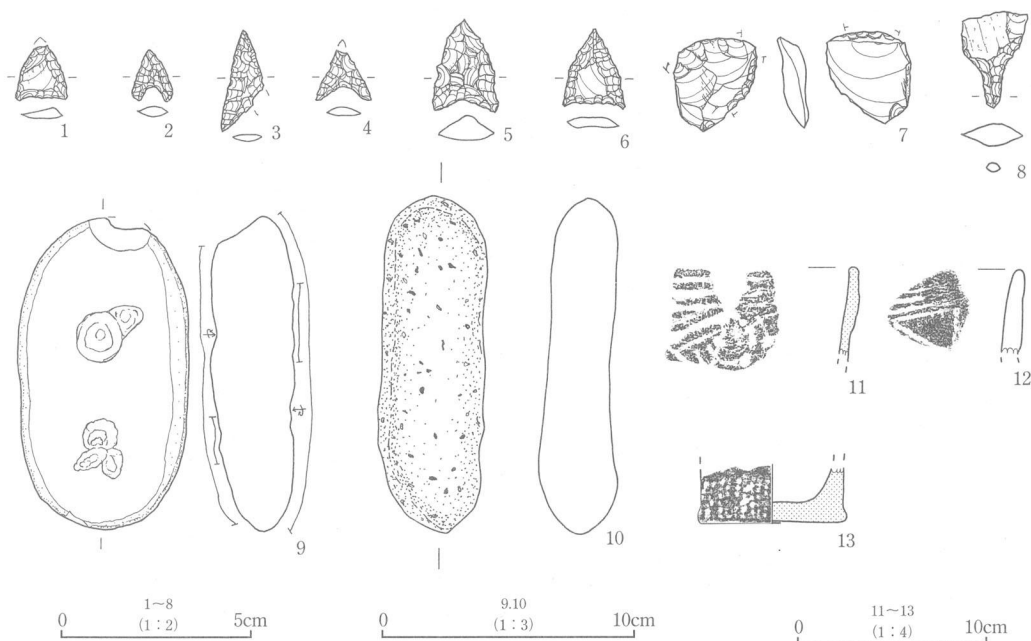
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強く、白色パミスを少量含む。
- 2層 褐灰色土 (10YR4/1) しまり強く、白色パミスを多量含む、オレンジの粒子を含む。
- 3層 黒色土 (10YR2/1) しまり非常にあり、 $\phi 1 \sim 2$ mmのパミスを少量含む。ローム粒子を含む。
- 4層 黒色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性あり。炭化物を多量含む。
- 5層 褐色土 (10YR4/4) しまり非常にあり、黄金色のパミスを多量含む。壁地山とよく似ている。
- 6層 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり、粘土質の土に黒色土のブロックを含む。
- 7層 黒色土 (10YR2/1) しまり弱く、粘性あり、黄金色のパミスを多量含む、ロームブロックを含む。
- 8層 褐色土 (10YR4/4) しまり強く、ロームブロックを多量含む。
- 9層 黒色土 (10YR2/1) 炭化物・ローム粒子少量含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2) ロームブロック少量含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2) パミス・ローム粒子を少量含む。
- 12層 褐色土 (10YR4/6) ローム粒子多量含む。
- 13層 褐色土 (10YR4/4) しまり、粘性あり。褐色土 (ローム土)、黄金色の粒子を多量含む。(貼床)

第20図 IH12号住居址実測図

形態はほぼ隅丸方形を呈する。炉は不明であった。規模は長軸6.04m(推定)・短軸5.98m(推定)で、壁高さは南西部で74cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は推定で14㎡を測る。覆土は4層に分れる。床は貼床が施されており、硬質化していた。貼床の厚みは8cmを測る。壁溝は南西コーナーから南と東側にかけて検出された。断面形はU字形で、幅は10~52cm・深さ6cmを測る。ピットは床面で3カ所、掘り方時6カ所の合計9カ所が確認された。規模はP1が径53cm・深さ59cm、P2が径57cm・深さ25cm、P3が径40cm・深さ39cm、P4が径19cm・深さ10cm、P5が径27cm・深さ29cm、P6が径38cm・深さ18cm、P7が径36cm・深さ18cm、P8が径13cm・深さ6cm、P9が径20cm・深さ19cmを測る。

なお、本址は先に述べたIH4号住居址とこの後記載するIH14号住居址の3軒の住居址が重複している。この重複関係は調査段階においてH4号の炉がH12号の床面よりも高い(8cm)位置で検出された事やH14号住居址の壁溝ラインが微妙に先の2軒とは異なる事などから判断された。しかし、整理段階においてはH12号住居址の炉が検出されないことや住居址プランからするとH14号住居址壁溝が他2軒の住居址壁溝につながっても支障がない事などが解り3軒の住居址は同一住居址と考えても差し支えないと考えられたが、報告書では調査段階の判断を優先した。

出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。図示した石器類の内9はP3から、10が住居址中央部の床直から、土器類については3がP7脇の床直から出土した。それ以外のものについては覆土中の出土である。これらの遺物より本址は縄文前期中葉に位置づけられると考える。

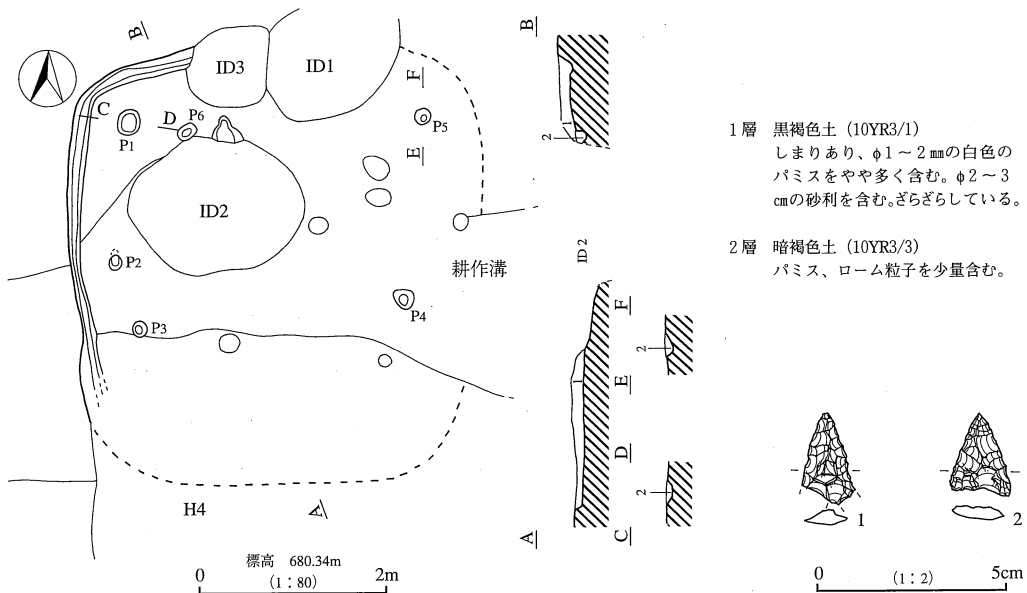


第21図 IH12号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法 量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石 材	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鎌	7.5	14.0	3.5	0.6	平基		両面	急角度	頁 岩	先端部欠員。右側は表面側に急角度剥離を施す。基部整形でカエシ部がわずかに作出される。
2	石 鎌	8.5	11.0	3.0	0.3	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	抉り深い。
3	石 鎌	22.0	11.5	2.5	0.4	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	右側カエシ部欠損。先端からカエシ部の屈曲点に両側からやや深い剥離が入る。
4	石 鎌	12.0	15.0	2.5	0.3	凹基		両面	平坦	黒 曜 石	先端部欠損。
5	石 鎌	23.0	13.0	7.0	1.8	凹基		両面	平坦	玉 髓	裏面を平坦に加工し、表面には剥離できなかった部分がこぶ状に残る。
6	石 鎌	21.5	12.0	3.0	0.9	平基		両面	平坦	チャート	表裏に素材面を残す。基部は、平坦に加工し、カエシ部をわずかに作出する。
7	削 器	25.0	22.5	8.0	3.5			正	急角度	黒 曜 石	右側面に急角度剥離で加工され、MFが顕著。刃部と思われる。
8	石 錐	25.5	18.0	6.0	1.9	Y字		両面	急角度	チャート	先端部欠損。経長剥片を用い、礫打面を残し、末端辺を刃部に加工。
9	敲 石	124.5	68.3	37.0	318.8		長楕円礫			安 山 岩	表裏に敲打痕が2対ある。
10	敲 石	135.0	44.3	32.0	270.4		長楕円礫			安 山 岩	上下端部に敲打痕。

挿図番号	器種	法量(cm)	文 様 ・ 調 整 外 面 ・ 内 面	色 調 土	備 考
11	深 鉢 口縁部	— <4.8> —	外面 半截竹管状工具による沈線内にきざみを施す 内面 ナデ ※繊維を含む	2.5YR 7/8 橙	関 山 I
				断面黒色 径1~2mmの白色粒子を微量含む	
12	深 鉢 口縁部	— <4.3> —	外面 半截竹管状工具による平行沈線 内面 ナデ	10YR 4/1 褐灰	
				径1~2mmの赤色粒子を含む	
13	深 鉢 底部	— <2.8> 7.6	外面 橢圓状工具による連続刺突文 内面 ナデ ※繊維を微量含む	5YR 5/8 明赤褐	神ノ木
				径2~3mmの赤色粒子と径1~2mmの白色砂粒を多く含む	

第11表 I H12号住居址出土遺物観察表



第22図 I H14号住居址及び出土遺物実測図

(7) I H14号住居址 (第22図、写真図版六②)

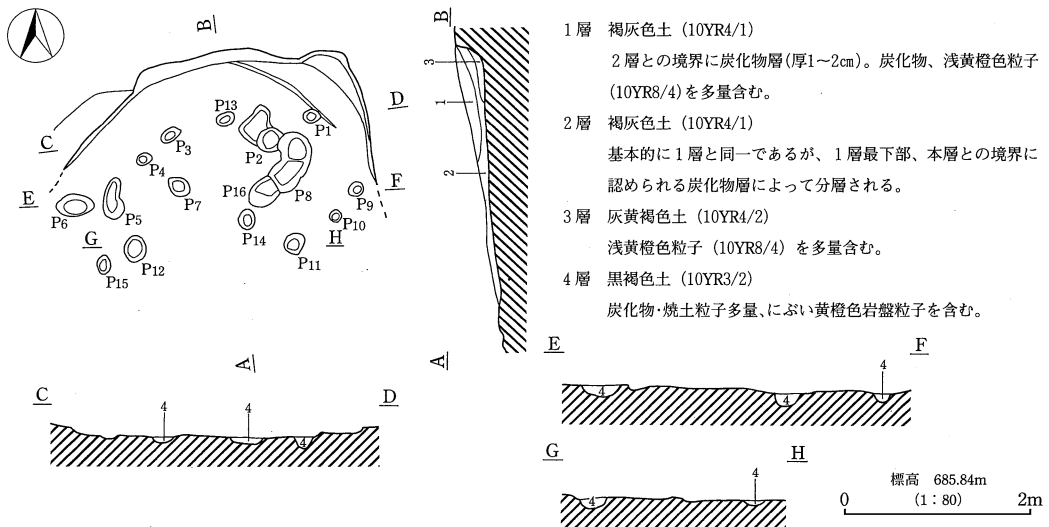
本住居址は、調査区東側台地の先端部であるG-キー7・8、G-クー7・8Grに位置する。残存状態は東側が地形の傾斜によって、中央が近世の耕作溝によりそれぞれ削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は確認されなかった。規模は北壁1.24m(残存)3.96m(推定)・南壁3.40m(推定)・西壁3.2m(残存)3.94m(推定)・東壁4.02m(推定)で、壁高さは西壁南よりで29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。長軸方位は不明である。住居址の床面積は推定で16.4㎡、残存部で1.3㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と北壁に確認された。壁溝規模は幅10~18cm・深さ7cm、断面形はU字形を呈する。ピットは6カ所が確認された。規模はP1が径27cm・深さ8cm、P2が径18cm・深さ13cm、P3が径16cm・深さ11cm、P4が径23cm・深さ14cm、P5が径19cm・深さ47cm、P6が径22cm・深さ12cmを測る。本址からの遺物は覆土中を中心に出土した。土器類は出土せず、図示した石器2点があったのみである。本址は出土遺物が少なく所産時期を求めづらいが、先の住居址項で述べたようにH4号・H12号と同一住居の可能性があるので、縄文前期中葉として捉えておきたい。

挿図番号	器種	法量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鏃	29.0	14.5	4.0	1.0	凹基		両面	平坦	チャート	カエシ部欠損。裏面を平坦に加工し、表面には剥離できなかった部分が、こぶ状に残る。
2	石 鏃	21.5	16.0	3.0	1.3	平基		両面	平坦	チャート	右カエシ部の作りが左側のものどちがい、左側の裏面側は加工されない。

第12表 I H14号住居址出土遺物観察表

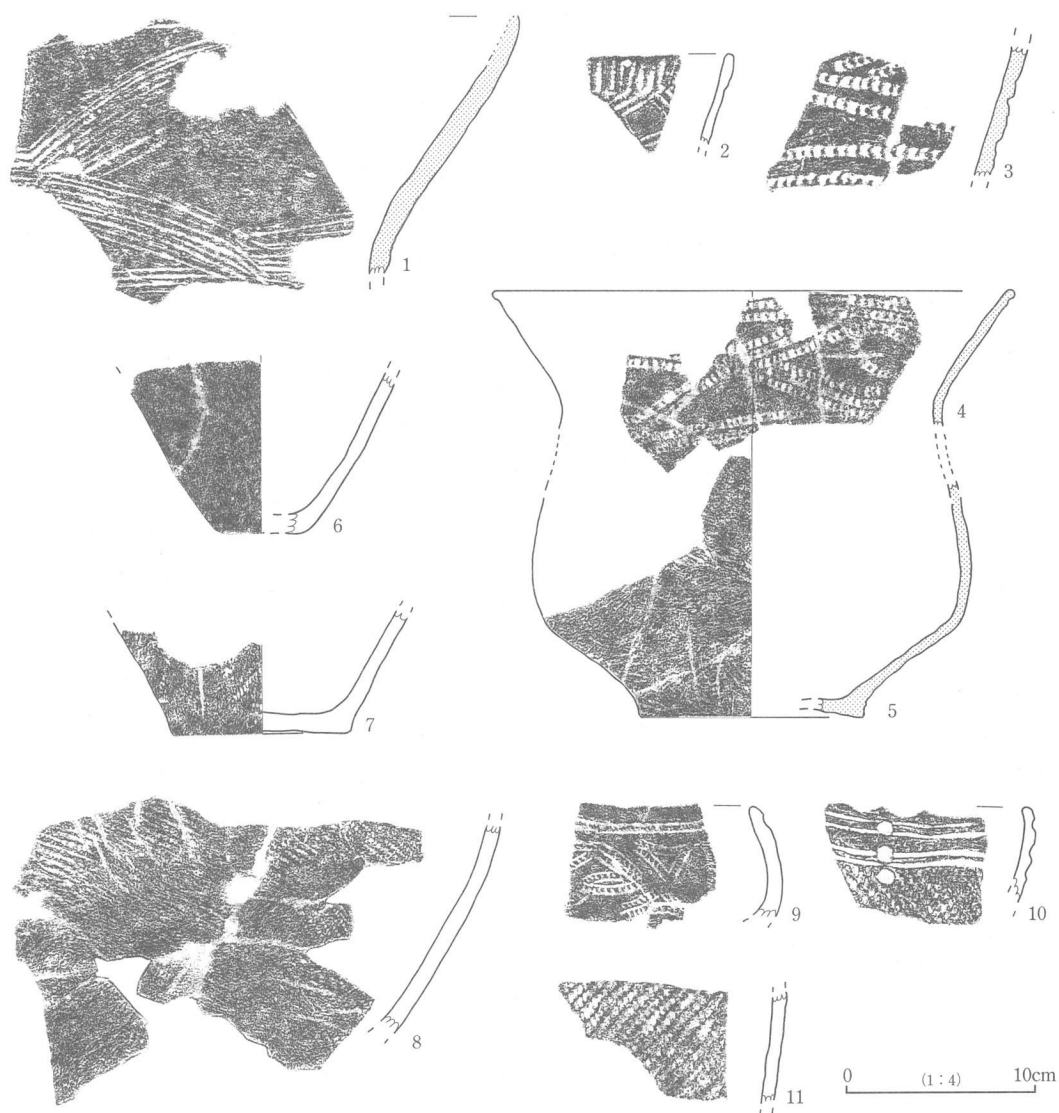
(8) I H16号住居址 (第23~25図、写真図版七①)



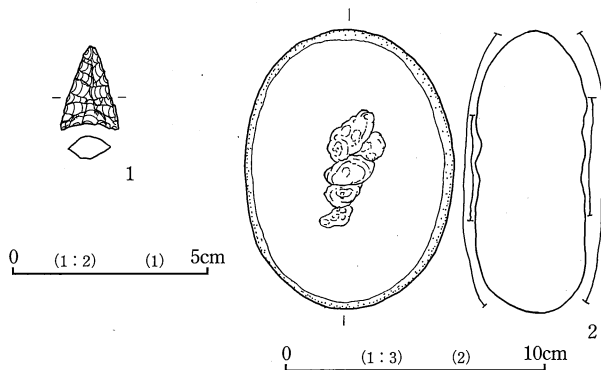
第23図 I H16号住居址実測図

本住居址は、調査区東端の台地南斜面であるJ-コー14、J-サー14Grに位置する。残存状態は南側半分が地形により削平され、北側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ円形を呈すると考えられる。炉は検出されなかった。規模は東西長3.34m(残存)で、壁高さは北側中央で29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は推定で7.8㎡を測る。覆土は3層に分れ、中間に炭化物を多く含んでいた。床は住居址中央部が硬質であった。壁溝は確認されていない。ピットは16カ所が確認された。規模はP1が径16cm・深さ14cm、P2が径29cm・深さ17cm、P3が径21cm・深さ12cm、P4が径14cm・深さ9cm、P5が径43cm・深さ13cm、P6が径40cm・深さ14cm、P7が径27cm・深さ10cm、P8が径63cm・深さ22cm、P9が径15cm・深さ



第24図 I H16号住居址出土遺物実測図①



第25図 I H16号住居址出土遺物実測図②

さ11cm、P10が径12cm・深さ12cm、P11が径23cm・深さ6cm、P12が径30cm・深さ13cm、P13が径20cm・深さ5cm、P14が径22cm・深さ6cm、P15が径22cm・深さ13cm、P16が径34cm・深さ15cmを測る。P1・P13・P3・P4・P9はその検出位置より壁柱穴とも考えられる。

本址からの遺物は覆土中と床面を中心に出土した。図示した土器の出土位

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色調土	備考
1	深鉢口縁部	— <13.7> —	外面 半截竹管状工具による沈線により菱形を描く 内面 横方向のナデ ※繊維を少量含む	10YR 7/3 にぶい黄橙 径1~2mmの赤色粒子多量と白色砂粒を含む	有尾
2	深鉢口縁部	— <4.8> —	外面 口唇部に筒筒状工具による連続刺突文を施し、胴部に半截竹管状工具による沈線平行沈線を施す 内面 ナデ	5 YR 6/4 にぶい橙 大粒の白色砂粒を多く含む	神ノ木
3	深鉢胴部	— <7.0> —	外面 半截竹管状工具による爪形文を器面に対して斜め方向より刺突 内面 ナデ ※繊維を微量含む	5 YR 6/4 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒を多く含む	有尾
4	深鉢口縁部	— — —	外面 半截竹管状工具による爪形文を器面に対して斜め方向より刺突 菱形を描く 内面 ナデ ※繊維を微量含む 5と同一個体の可能性	5 YR 5/6 明赤褐 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒を多く含む	有尾
5	深鉢胴底部	— — (12.0)	外面 器面が荒れていて不明 底部付近縄文? 内面 ナデ ※繊維を微量含む 4と同一個体の可能性	5 YR 5/6 明赤褐 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒を多く含む	有尾
6	深鉢底部	— <8.5> (4.5)	外面 ナデ 内面 ナデ	7.5YR 5/6 明赤褐 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒を多く含む	
7	深鉢胴部	— <6.4> (9.5)	外面 縄文を施すが不鮮明 内面 ナデ	5 YR 5/6 明赤褐 径2~3mmの白色砂粒を非常に多く含む	
8	深鉢胴部	— <11.1> —	外面 縄文 RL 内面 ナデ	5 YR 4/6 赤褐 径1~2mmの赤色粒子微量と白色砂粒多量含む	
9	深鉢口縁部	— <5.8> —	外面 半截竹管による沈線上に連続刺突 内面 ミガキ	5 YR 5/6 明赤褐 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒をやや多く含む	諸磯 a
10	深鉢口縁部	— <5.2> —	外面 縄文 RL上に半截竹管による平行沈線と凹形刺突文を施す 内面 ナデ	7.5YR 5/2 灰褐 径2~3mmの長石を多く含む	諸磯 a
11	深鉢胴部	— <6.0> —	外面 縄文 LR 内面 ナデ	7.5YR 7/3 にぶい橙 径1~2mmの赤色粒子を微量含み、長石と砂粒を多量含む	

挿図番号	器種	法量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	石 鉢	21.5	15.0	6.0	1.3	凹基		両面	急角度	チャート	厚みがあり、断面菱形になる。
2	磨石十敲石	108.0	81.8	49.0	512.9		長楕円礫			安山岩	表裏に敲打痕が明瞭にある。スリ面は表裏にあるが不明瞭。

第13表 I H16号住居址出土遺物観察表

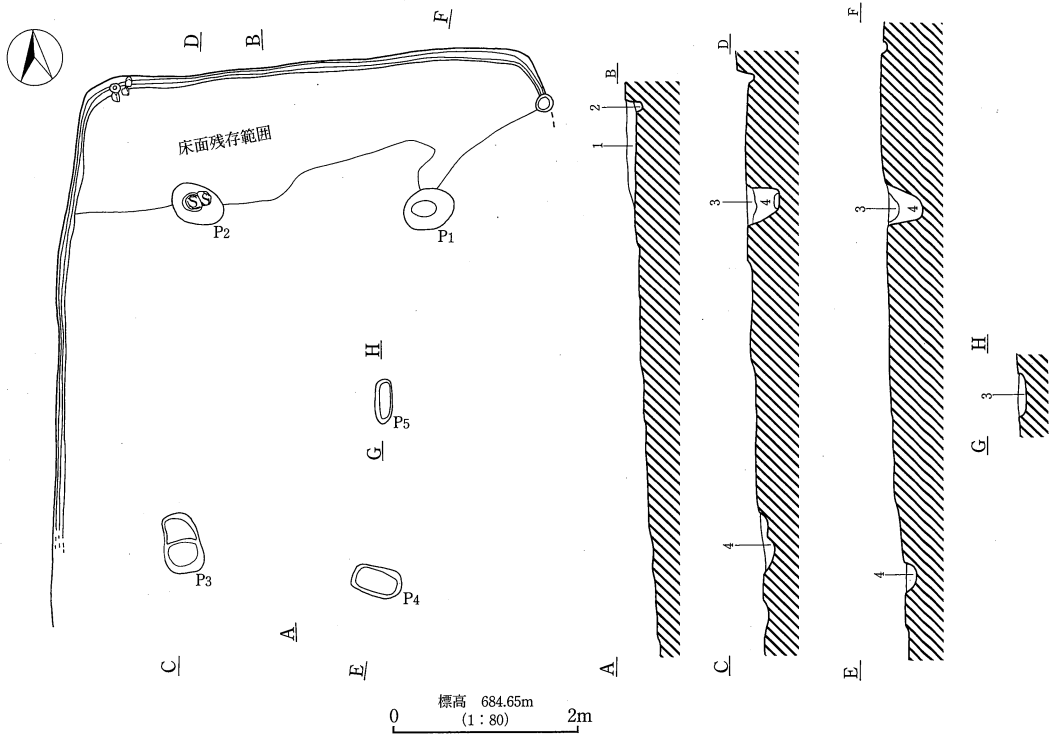
置は1・2・7・10・11が覆土中、3・5・6・8・9がP2内、4がP7より出土しいずれも床直であった。4と5はいずれも深鉢の口縁部と胴部破片であるが胎土から同一個体の可能性がある為図上において推定復元した。石器類は1が床面より、2がP2脇の床面より出土した。

これらの遺物より本址は縄文前期中葉末に位置づけられると考える。

(9) IH27号住居址 (第26・27図、写真図版七②)

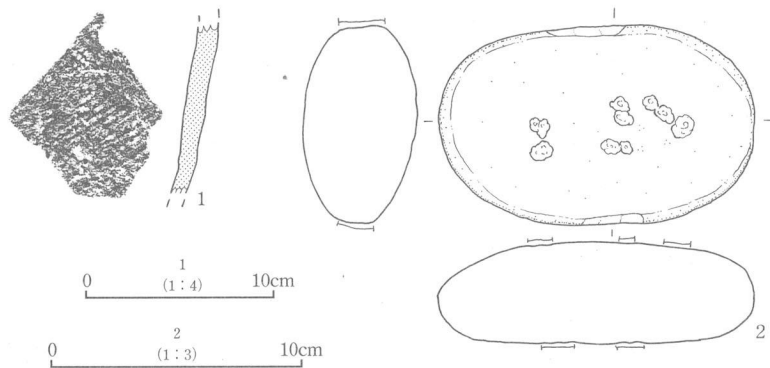
本住居址は、調査区中央部台地の東先端であるK-エー12・13、K-オー12・13、K-カー12Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平されており、西側が「コ」の字状に残存していた。

形態はほぼ長方形を呈する。炉は検出されなかった。規模は北壁4.72m・西壁5.8m(残存)・東壁0.44m(残存)で、壁高さは北西コーナーで21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は残存で5.5㎡を測る。長軸方位はNを示す。壁溝は検出された北壁と西壁に巡っていた。規模は幅6~17cm・深さ7cmで、断面形はU字形を呈する。ピットは5カ所確認された。規模はP1



- 1層 黒褐色土 (10YR3/2) 岩盤粒子を含む。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 岩盤ブロック (1m大) 多量含む。壁溝内フク土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) 岩盤粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 岩盤ブロックを多量含む。

第26図 IH27号住居址実測図



第27図 I H27号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色胎 調土	備考
1	深鉢 胴部	— <9.1> —	外面 羽状縄文 内面 ナデ ※繊維を多量に含む	5YR3/1 黒褐 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	

挿図番号	器種	法量 (mm・g)				形態	素材	剥離 方向	剥離 面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
2	磨石+砥石	126.0	79.5	43.0	576.6		長楕円礫			安山岩	表裏敲打点が散漫にある。スリ面もあるが不明瞭。両側にタキによる平坦面が見られる。

第14表 I H27号住居址出土遺物観察表

が径53cm・深さ42cm、P2が径56cm・深さ39cm、P3が径64cm・深さ17cm、P4が径54cm・深さ21cm、P5が径47cm・深さ9cmを測る。またP2内には扁平な拳大の礫が2点入っていた。これらピットの内P1~P4が支柱穴と考えられる。

本址の出土遺物は覆土中より極僅か出土したのみであった。図示した深鉢胴部破片は覆土中より、磨り石は北西コーナーより出土した。本址からの出土遺物は少なく遺構の帰属時期の判断には不確実性が伴うが縄文前期前半頃と考えたい。

(10)ⅢH33号住居址 (第28~30図、写真図版八①)

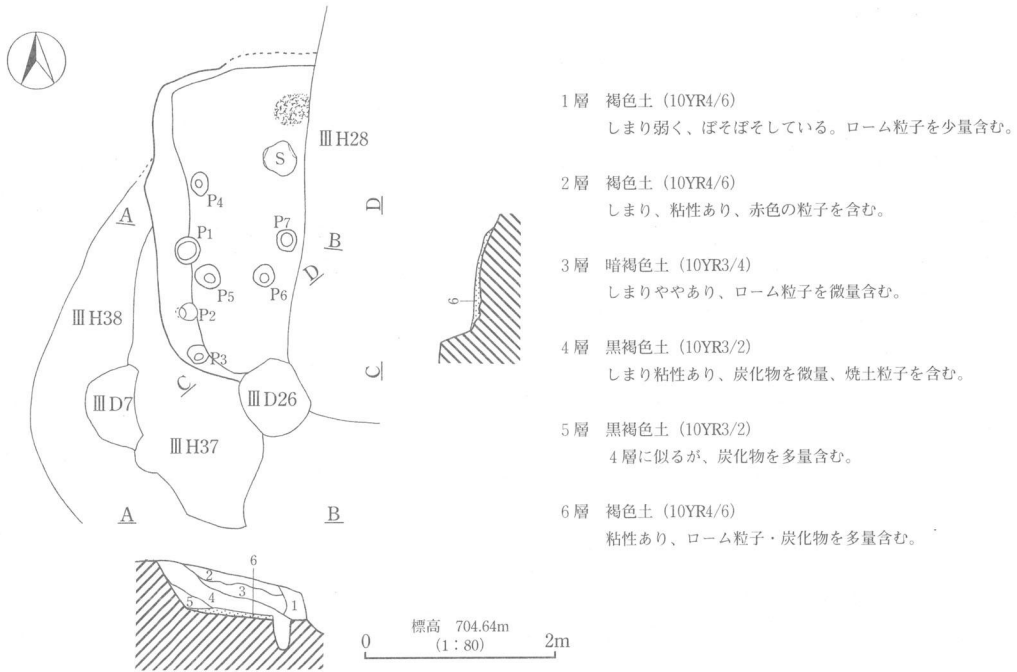
本住居址は、調査区最上段の台地中央部であるL-セー2Grに位置する。残存状態は東側半分がⅢH28号住居址により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。また、縄文中期の住居址であるⅢH37号住居址が上部に重なる。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。炉は北壁際に焼土が検出されたが硬質の焼土で「炉」的ではなかった。規模は北壁1.6m(残存)・南壁1.16m(残存)・西壁2.8mで、壁高さは西壁中央部で50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は西壁を基準とするとN-3°-Wを示すが、住居址は東西方向に長軸をもつ住居址と考えられる。住居址の床面積は残存で3.6㎡を測る。覆土は4層に分れ、炭化物を微量含んでいた。床はやや軟質であった。壁溝は確認されていない。

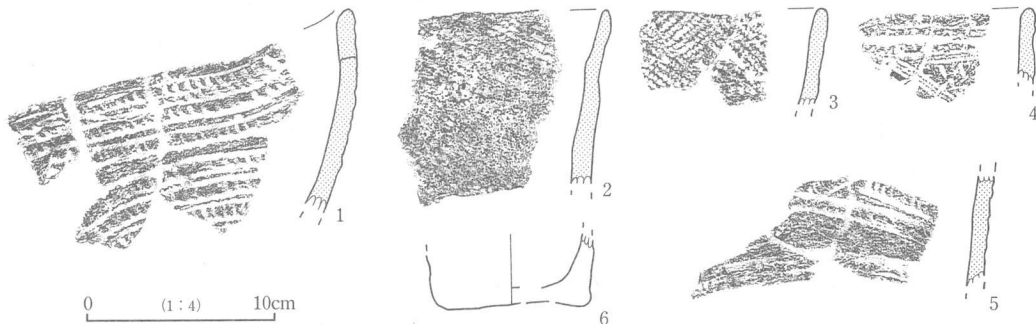
ピットは床面精査時3カ所、掘り方時4カ所の計7カ所が確認された。規模はP1が径26cm・深さ27cm、P2が径20cm・深さ43cm、P3が径23cm・深さ40cm、P4が径25cm・深さ27cm、P5が径26cm・深さ20cm、P6が径22cm・深さ18cm、P7が径23cm・深さ28cmを測る。

本址からの遺物はP6近辺の床面より出土した。図示した土器もすべてこのP6周辺からの出土であるが、6は床面よりも浮いた状態で出土しており、その胎土から縄文中期の混入品とも考えられる。1と4は覆土中からの出土である。石器類については図示した2点とも覆土中からの出土である。

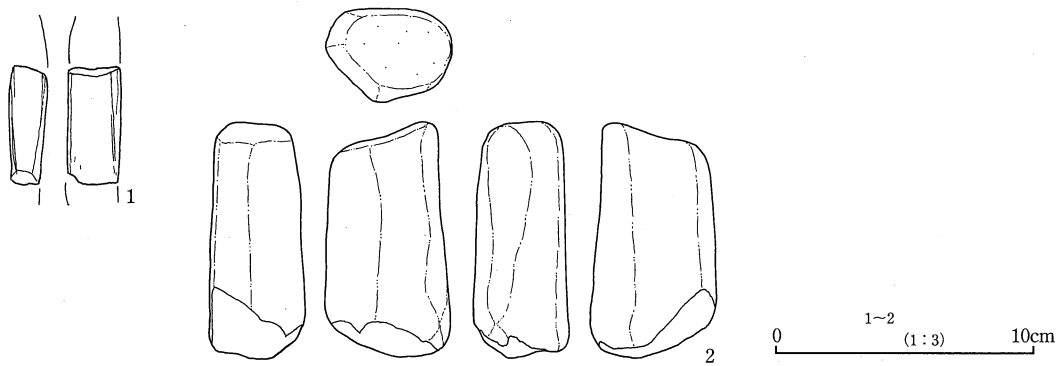
これらの遺物より本址は縄文前期中葉に位置づけられると考える。



第28図 III H33号住居址実測図



第29図 III H33号住居址出土遺物実測図①



第30図 ⅢH33号住居址出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色調 胎土	備考
1	深鉢 口縁部	— <10.7> —	外面 半截竹管状工具による沈線上に外皮側による竹管文(外側竹管文)を施す 内面 ナデ ※繊維を多く含む	5 YR 4/4 にぶい赤褐 断面黒色 径1~2mmの赤色粒子と砂粒を微量含む	有尾
2	深鉢 口縁部	— <9.2> —	外面 東の縄文? 内面 調整不明 ※繊維を多く含む	5 YR 3/3 暗赤褐 断面黒色 径1~2mmの赤色粒子と白色砂粒を多く含む	
3	深鉢 口縁部	— <5.0> —	外面 羽状縄文 内面 ミガキ ※繊維を含む	10YR 6/2 灰黄褐 断面黒色 径1~2mmの砂粒を少量含む	
4	深鉢 口縁部	— <4.0> —	外面 口唇部に半截竹管状工具による沈線、口縁部に撚糸による区画内に刺切文を充填 凹形刺突を施す 内面 ナデ ※繊維を含む	7.5YR 5/6 明褐 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	花積的
5	深鉢	— <5.9> —	外面 半截竹管状工具による沈線上に連続刺突文を施す 内面 ナデ ※繊維を含む	5 YR 4/6 赤褐 断面黒色 径2~3mmの長石を多く含む	有尾?
6	深鉢	— <3.9> 7.5	外面 無文 内面 ナデ	7.5YR 8/6 浅黄橙 径1~2mmの白色砂粒を多く含む	中期混入?

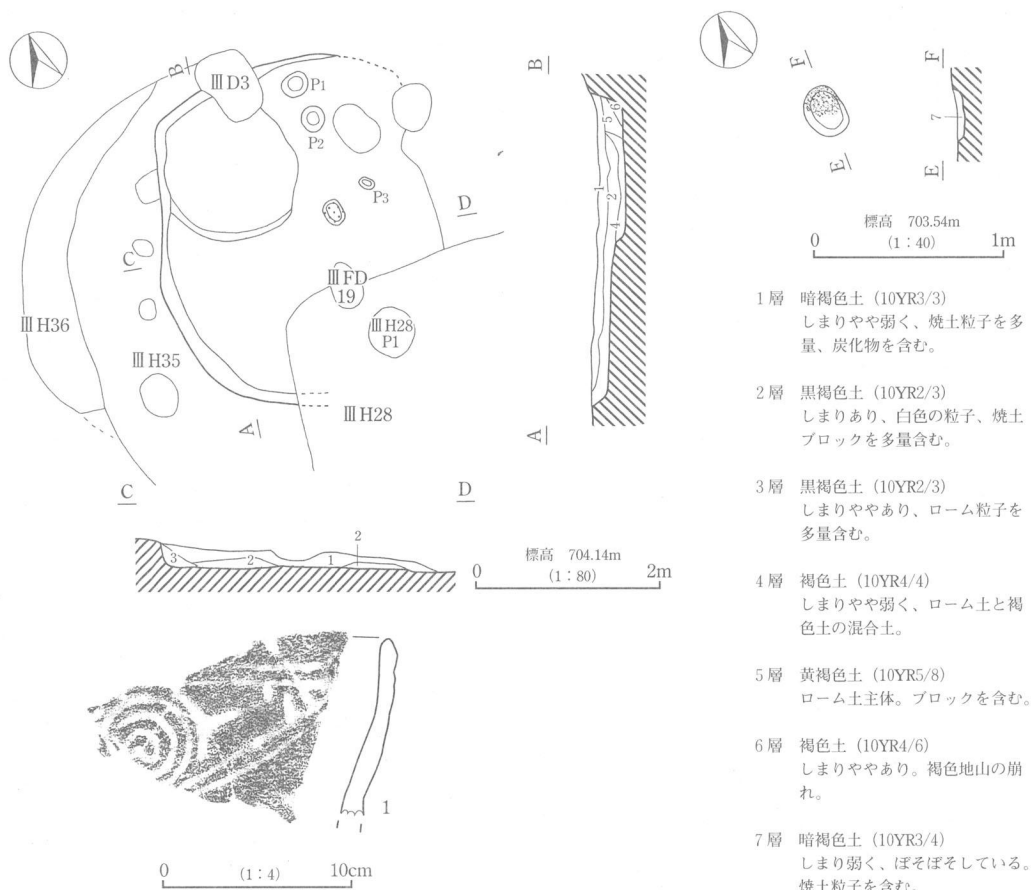
挿図番号	器種	法量(mm・g)				形態	素材	剥離方向	剥離面	石材	備考
		長さ	幅	厚さ	重量						
1	磨製石斧?	45.8	21.8	10.0	23.7				頁岩	磨製石斧の断辺か?若干摩耗が見られる。	
2	原石?	91.5	49.5	37.5	228.4				安山岩	石器原材か?	

第15表 ⅢH33号住居址出土遺物観察表

(11)ⅢH41号住居址 (第31図、写真図版八②)

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるL-セー1Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形による傾斜で、また南側にはⅢH28号住居址により削平され、上部には縄文中期の住居址であるⅢH35号住居址が覆っている。

形態はほぼ南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。炉は住居址中央で検出された。規模は北壁2.10m(残存)・南壁0.90m(残存)・西壁2.80mで、壁高さは南西コーナーで29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は西壁を基にするとN-10°-Eであり、住居址の床面積は残存で6.6



第31図 III H41号住居址及び出土遺物実測図

m²を測る。覆土は3層に分れ、床は中央部分が硬質であり、地山を踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは3カ所のみ確認され、規模はP1が径27cm・深さ34cm、P2が径28cm・深さ32cm、P3が径17cm・深さ15cmを測る。また、本址は住居址北西コーナーに土坑的掘り込みが検出された。規模は長軸1.65m・短軸1.45m・深さ36cmを測る。炉はほぼ住居址中央部で検出された。形態は円形で、規模は長軸27cm・短軸21cmの掘り込みを持ち、焼土が薄く堆積していた。

本址からの遺物は図示した土器1点のみであり、覆土中からの出土である。よって本址の帰属時期は不確実な部分も多いがおおよそ縄文中期初頭に位置づけられると考えられる。

挿図番号	器種	法量 (cm)	文様・調整 外面・内面	色調 胎土	備考
1	深鉢 口縁部	— <9, 5 —	外面 縄文地紋に沈線による渦巻文と斜行沈線を施す 内面 ナデ	7.5YR3/2 黒褐	
				径2~3mmの石英・長石・金雲母を多く含む	

第16表 III H41号住居址出土遺物観察表